
俺にかまわず先に行け！！！！俺？追いかけるわけねえだろ

仲鈍要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺にかまわず先に行け！！・・・俺？追いかけるわけねえだろ

【Nコード】

N5712X

【作者名】

仲鈍要

【あらすじ】

俺の名前は斉藤隆盛、これといって特に目立つこともない普通の人間だ。幼馴染には完璧超人がいるが、そいつには常日頃殺意を抱いている。

そんな幼馴染と一緒に帰っているといきなり地面が光り出した。俺は咄嗟にその場から飛退き、幼馴染の背中を押し、光の渦の中心へと追いやった。そして次の瞬間には幼馴染の姿は消えていた。よっしゃ！これでこいつにかき乱されることのない人生を送れるぜ！！そう思っていたのだが、何故俺の真下に光の渦が現れる？

これは俺と一緒に異世界に飛ばされた者たちと送るちよっとおかしくて平穏な物語。

いつ召喚されるか果てしなく未定のプロローグ（前書き）

あいかわらずの駄文以下の物ですが、ほんの少しでも楽しんでいただければ幸いです。

いつ召喚されるか果てしなく未定のプロローグ

体育館の裏、俺は彼女に呼び出されていた。

「ごめんなさい、隆盛君、わたし好きな人が出来ちゃったの」

俺、斉藤隆盛（さいとう りゅうせい）だれだ！？もりたかって読んだの！！！！）は人生で3度目の恋人に振られる経験をしたのだった。しかもその全部が1カ月以内今回は3日で振られた。

「相手、誰なのか聞いてもいいかな？」

3度目となればショックはあるが、三度目となればある程度の耐性はある、俺は動揺を隠しながらも冷静を装い尋ねる。

「隆盛君の幼馴染の・・・」

「また・・・かよ」

俺の元恋人は恥ずかしそうに頬を赤らめながら相手の名前を言おうとうするが途中まで聞けばもう十分だ。

俺の恋人を奪った相手・・・今回も含め3回すべて同じ相手だ。あいつは俺にとっては最低なやつだが、彼女にとっては大切な人だ。それにその幼馴染を、いくら一方的に振ってきたとはいえこちらから告白した身だ、好きだった人の前で一方的に貶すのはあまりしたくない。

「でも、分かってるの？」

おそらくすべて承知の上なのだろう、だけど俺は尋ねる。

「分かっているわ、でも私はあの人が好きなの!!!!」

「そう・・・じゃあ俺は加奈ちゃんの幸せを願うよ。」

俺は元恋人の加奈に涙を浮かべながらも精一杯作った笑顔を向ける。

「ありがとう!!!!」

加奈も俺にとびっきりの笑顔を向け、去っていく。だけどこの笑顔は俺に向けられたものではことを理解している。

「・・・あいつ死なねえかな」

加奈が去っていったのを確認した後に俺は露骨に嫌悪した顔でそう呟く。対象はもちろん俺の彼女を（おそらく）寝とった幼馴染だ。NTRされた奴の嫉妬？それでもいいさ、この悔しさは誰にもわからない。むしろ最近耐性ではなくNTR属性がついてきた気がする。

「ハアツ、あいついつか絶対泣かしてやる」

さて、ここで突然だが俺の自己紹介をしておこうか。

俺の名前は斉藤隆盛、さいとりゅうせいだ。間違ってもさいとうもりたかじゃない。2回目だが俺にとっては重要なので言わせてもらった。

私立、島ヶ先高校に通うごく普通の生徒だ、強いて違う所があるとすれば副生徒会長つてところくらいかな

成績も悪くはないがすごく良いというわけではない、運動も同様。好きなタイプは髪色は何色でもいいがロング これだけは外せない。

それと背はちつちやめで童顔が良い。胸はもちろん控え目が好きだ。それと冒頭のシーンで女性に振られていたことからわかるようにノーマルだ。女性に振られたからといって男色に目覚めたり2次元の世界に目覚めたりはしていない・・・かろうじて。一時ラ + にガチではまったがなんとか戻ってこれた。

さて、次にここにはおらず名前すら出てこないくせに存在だけはやたらと主張されている俺の幼馴染について軽く紹介しようか。

こいつを一言で表すならば漫画やゲームでよくいるような完璧超人、これに尽きる。容姿、学力、運動神経、性格どれをとっても完璧だ。天は2物を与えずとかほざいた奴に俺は顔面パンチを食らわせた後にその顔面にひざ蹴りを食らわせてやりたい。

そしてその容姿ゆえに学校内にファンクラブができている、いや学校内だけでなく他校にだってできていると噂を聞くぐらいだ。

学校では常に人に囲まれており、生徒会長として存分にその魅力を発揮している。そのせいで幼馴染兼副生徒会長という近い立場にある俺に嫉妬を向けてくる少数ながら者がいるがそれは果てしないかほどに筋違いだ。

――なぜそんな完璧超人の近くにいながらも俺に嫉妬が向けられていないのか？

その理由を一つずつ説明していこう。

まず第一に完璧生徒会長様は同性愛者だ。誰だ！？アーツとかいったやつ。何を勘違いしているか知らないが生徒会長は女だ。

つまり俺は過去2回、現在終了で1回女に女を寝とられた。

第二に生徒会長様はその同性愛の趣味を公言していらっしやる、さらにハーレムを作り上げるとか堂々と言っているくせに生徒会長に

寄（酔）っていく女生徒は多い。

男子生徒？あるのは玉砕だけだよ。それでも性格もいいし、容姿もいいから玉砕する物は後を絶たないし、恨みを買うこともない。ただし、彼女を寝とられたやつ（俺）にはひたすらに恨みを買っているがな。

第三にその同性愛の関係も非常にオープンでいらっしやる。どれくらいオープンかというと放課後に生徒会室からしか行けない一室（鍵付き+なぜか防音設備まである）で生徒会長と女生徒（日替わり）でその部屋にはいり放課後はお楽しみでしたな状態だ。

しかもいやなことに俺以外の生徒会メンバーが女なので、俺以外の全員でその部屋に行くことがよくある。

生徒会の仕事は俺の仕事。いくら声が聞こえないとはいえ隣の部屋でそんなことをされていると思うと気が散るので、少し離れたところにある放送室に入れさせてもらい仕事をやっている。

仕事しろといったところで聞き入れてくれるはずもないし、なぜか俺が悪いことにされるので俺は抵抗を諦め黙々と放送室で作業を進める。

俺はよく耐えていると思う、この理不尽な仕打ちに。それとこれは完全に蛇足だがなぜか俺が友人とあの子可愛いねーなどとそんな話で友人（男）と話していると早くて一日遅くとも一週間後には幼馴染のハーレムメンバーの一人になっている。

絶対に悪意を持ってやっているのだろうが、証拠もなく抗議したところで相手にされないもしくははからかわれるだけなので俺はそろそろ愛を捨てようかと真剣に悩んでいる。

そろそろ本気で愛など要らぬ！！って叫べそうだ。流石に付き合って三日後に振られるのはショックが大きい。

「ああ、父さん母さんごめんなさい。俺はあなたたちに孫の顔を見せてあげられそうにないです。」

涙を堪え空を見上げる。滲んで見えた。空の青さと雲の白さだけは分かった。天気は俺の心模様とは裏腹に快晴だ。

・・・いつまでそうしていただろうか？空はすでにオレンジ色に染まり、逢魔が時を迎えた。涙はすでに乾いていた。心の中に広がるオアシスもすでに乾いていた。

「帰ろうか。」

俺は生徒会室に置きっぱなしの鞆を取りに行くために校舎へと向かった。

カツンカツンと歩くたびに廊下と上履きから発せられる音が響く。生徒会室の前まで来ると俺はいったん止まり、扉に手をかける。ガツガツ。と開こうとするが途中で止まる。どうやら鍵が閉められているようだ。

俺はポケットの中から鍵を取り出し、鍵を開け、生徒会室へとはいる。

「おさま」

隣の部屋からは防音のはずなのに艶っぽい声が漏れている。心の中で舌打ちし、死ねと口で呟く。

「鍵置いておきますんで戸締りお願いします」

俺は行為に夢中で聞こえていないであろう幼馴染にその声をかけ、
鍵を机の上に置き、生徒会室から立ち去る。

俺は家に帰ると、制服も脱がずにベッドにダイブした。ベッドにダ
イブするとすぐに眠気が襲ってきた。

「りゅうせいーはんよー」

俺を呼ぶ声が聞こえ、目を覚ました・・・枕はかなり濡れていた。

もはや主人公にとって幼馴染はトラウマレベル(前書き)

バイト行ってき

もはや主人公にとって幼馴染はトラウマレベル

俺の視界は真っ黒に染まった、いやこれは比喻表現であり、実際にはちゃんと目の前の光景は映っている。

俺は”それ”を認識した瞬間に体が硬直し、次に自然と体が震えだした。強敵（と書いて友と読む）にであったりや、歓喜に体が震えているからではない。

それは恐怖、もはや自分の安全地帯は無いのかと思う諦めにも似た恐怖、そして自分の個人空間プライベートを浸蝕されたかの如くの不快感。

——ふざけるな！！何故貴様がそこにいる！！！！

心の中でいくら叫んでもそれが実際に声になることはない、実際に声に出してしまえば家族から奇異の目で見られるに違いない。

故に俺は体の震えを必死に隠しながら、叫びたい衝動を抑える。

「いつ食べてもおばさまの料理はおいしいです」

「あらいやだわ、そらちゃん、こんなおばさん褒めたった何も出ないわよ。」

「本当のことを言っただけですよ」

「私、そらちゃんみたいなのが欲しかったわ。隆盛みたいな子じゃなくてそらちゃんみたいなのが」

——何故貴様が俺の家にいる！！空！！！！！！

俺の心の平穏を乱すどころか、唯一残されたオアシスすらも枯らし

尽くすかのごとく（俺にとって）理不尽な存在、そして俺の幼馴染
神宮司 空がそこにいた。

「あら、隆盛君が起きたみたいですよ」

空は俺を勝ち誇ったような目で見てきた、ああ、無様だろうさ。つきあって三日目で同性に彼女を寝とられた男は惨めだろうさ。

俺は目の前からこの悪魔を消し去りたいという衝動を抑えながら食卓の席に着く。

「珍しいですね、生徒会長が家に来るなんて」

顔に笑顔を張り付け、どこか距離を置いているような言葉使いで俺は空に話しかける。実際距離をおきたい。だれかこの幼馴染をどこか遠いところへ連れて行ってくれ。

そして俺に彼女とイチャつける日々をくれ・・・いやもう彼女なんていなくてもいいかもな。

「ええ、ちよつと隆盛君とお話ししたいことがあって、それに最近
は隆盛君お話できなかつたから来てみようって」

ふざけんな、てめえのお話は完全なる愚痴じゃねえかよ。ここが学校であれば何か口実をつけて回避したいところだがここで回避しようとしたら母親+妹の旭日から説教喰らうこと間違いなし。
ちなみに妹はさっきからずっと空に対して熱い視線を送っています、だれかこの発情レズ娘をどうにかしてください。

「でもその前に旭日の相手をして上げてもらってもいいですか？
こいつは空のことが本当に大好きですから」

俺がそう言つと旭日は顔を真っ赤にして空を潤んだ瞳で見つめる。母はあらあら若いわねえなどと分かつているのか分かつていないのかよくわからないことを言っている。分かつているのだとしたら尊敬をせざるを得ない。

妹を時間稼ぎに使うのは我ながらうまい時間稼ぎだと思った、こいつがうまく時間を潰してくれば俺への被害が少なくなる、むしろ時間を潰し過ぎてそのまま帰ってくれるかもしれない。

俺の言葉に空は少し悩んだようなくさをしてから、構わないわよ。と返事をした。

俺は心の中でガッツポーズをした、今まではなんとなく気に食わない妹だったけど今だけは感謝してやろう。しっぽりとやっつけてくれ。

夕飯も食べおわり、空は旭日と一緒に旭日の部屋へと消えていった。幸いにも俺の部屋とは離れているので気にすることなく自分の部屋でゆっくりすることができる。

学校から宿題は出ていない、特にすることも無い。俺は携帯を取り出し某呟きサイトを開き、呟く。

親友に彼女寝とられたなう、その親友が家にいるなう。

親友というのは嘘だが、まあいいだろう。

数十秒後、ドンマイ等と慰める声とザマアwwwなどという心ない声が書かれていた。

続いて実はこれ3回目、しかも全部親友に寝とられた。

そう呟くと、今度は本気で憐れむような声と親友死ね、爆発しろという声が書かれていた。

特にこれ以上呟くこともないのでパソコンを立ち上げ、2chに親友に彼女とられたけどなんか質問ある?というスレタイでスレを立てた。

part3まで続いた。

「本当にいい加減にしてほしいわー、私は男なんかに興味ないんだってのに」

・・・どうしてこうなった、俺は今空と一緒に外を歩いている。空は旭日との情事に大してノリノリだったようで、相当な時間に及んだ。

俺はこれで助かった!!!と大喜びしたのだが家の母がそらちゃんを送っていきなさい、とふざけたことをぬかし、現在に至る。

そして愚痴をひたすらに聞かされ続けている。さっきまでの空?あんなん外面だ、こつちが本性。

「ハイハイ、ソラサマノミリヨクはスバラシイデスカラネー」

ひたすらに棒読みで空の愚痴に相槌を打つ。

「そついえば、ほら私があんたから取った子いるじゃん?加奈ちゃん。あの子いい子ね。今日学校で張り切っちゃったわ」

こいつの話をもとに聞いてはいけない、聞いてしまえば俺の心が持たない。

「ワアーソレハヨカツタデスネ」

俺は棒読みで返しているが空は何も言っていない、愚痴に夢中なのだ、それと俺の心を騷るのに。

「それでさ、流石にこれで3回目だし私もちよつとは悪いと思ってるわけよ。だから私のラヴァーズの中から誰か紹介してあげようか？」

「・・・ボクニハトテモモツタイナイオハナシデス」

激しく心が揺さぶられたがなんとか耐えた。だが平静を装うために間ができてしまった。

「一回ぐらいだったら私が相手して上げようか？女の子にしてあげることと同じでよければだけど」

「ボクニハトテモモツタイナイオハナシデスノデツツシンデエンリヨサセテイタダキマス（訳：ふざけんなレス野郎）」

先ほどまでの動揺はどこへ消えたのか一瞬で平静に戻れた。天敵に無防備な姿をさらせるわけがない、今度は背中から冷や汗が流れた。それにこの話は確実に冗談だとわかっている、その証拠に空の顔は笑っていないやがる。俺がこれに飛びついたら間違いなくネタにされる。

「ソラサマハトテモオウツクシイオカタデスノデワタクシノヨウナモノトハナスヨリモモツトスバラシイカタトハナシテイタホウガヨロシイトオモイマスヨ（訳：さつさとどこかへ行ってくれ。俺の平穩をぶち壊すな、つーか俺に関わらないでくれ）」

さつきから一人称が安定しない？気にするな。

「ははは、そろそろ真剣に私の愚痴を聞いてくれてもいいと思うのだが、ん？」

俺が棒読みで返しているところに空が切れた。今までは許してくれていたのに理不尽だ。空は俺の顎を右手で掴み、そのまま俺を持ち上げる。

片手でしかも大の男を持ち上げるって女の子としてどうよ？というか男でもできねーよ。だが、空なら仕方がない。

ここで下手に抵抗しても余計に痛い目を見るだけなのであごの痛みに目をつむりながら、抵抗を諦める。

「せっかく美少女が誘っているというのに中々つれないじゃないか。なあ幼馴染よ」

俺にとっては幼馴染と書いて天敵と読むんだよそう言ってやりたいが顎を掴まれており喋ることができない。仮に喋れたとしても喋らないが

「つい最近幼馴染に彼女を取られて女性不信に陥りそうなんですよ」

流石に片手で大の男を持ち上げ続けるのは辛いのか地面に下ろされあごも解放されたのでそう返した。

「ならばこの優しくて美しいこの私が幼馴染の女性不信を癒やしてやろうではないか、幸いにも私は女だしな」

空が大げさに手を広げながらそう言った。

「お前が男で、今と同じように人の彼女寝とっていたら女性不信どころか人間不信に陥ってたわ。」

そもそも女性不信の原因はお前だ。お前がいなくなれば俺の女性不信も治るだろうよ。

俺は神に祈るも空がいきなり目の前から消え去ることもなく、何事もなく俺は空を送り届け、家に帰った後に今日の学校のことを思い出し、再び枕を濡らした。

もはや主人公にとって幼馴染はトラウマレベル（後書き）

・・・べ、別に幼馴染とフラグ立っているわけじゃないんだからね
！！！！

いざというときのための逃げ道なんだから・・・

空「私の隆盛を取るなんてことさせないんだからな！！」
で主人公の彼女を寝とるなんて妄想できた人は幸せ

・・・いつになったら召喚されるの？

翌日、学校教室にて

「今あいつらデリケートな時期だろうから、気は進まないけどこのままじゃ俺の心も持たないしな」

俺はいつもより遅めに学校に登校し、とあるクラスメイトを探していた。

捜している人物は、松林雄吾まつばやし ゆうごが現筆頭のオタク半引きこもりのようなイメージしかもてない、世間からは犯罪者と思われていないようなグループ（つまりロリコンでオタク）の5人グループだ。

つい一週間ほど前までは6人グループで、雄吾がグループの筆頭ではなかったのだが元筆頭だった言成とかいうやつが奴がトラックに轢かれて死んだ。おかしなことにそのトラックは無人でありながら狭い道路を直進、狙い澄ましたかのごとく言成の近くで暴走を始め轢いたそうだ。

「すまない雄吾君ちよつといいかい？」

「オウフ、いきなり雄吾氏に話しかけるとは何ようでござるか。デユフフ」

う、うぜえ、何なんだこいつ？俺は戸惑いを隠せない、俺は確かに松林雄吾に話しかけたはずだった。だが返してきたのは鈴木政一すずき まさいちだった

なぜ、こいつの親は一をかすとよませずいちにしたのだろうか？普通通かすに思うのだが。

うのですな」

俺のその返答に4人は狂喜乱舞した。だが最後の一人、古川流ふるかわ ながるだけは冷静だった。

いや、その表情は冷静だとか冷めているだとかそんなものではない、完全なる無表情だった。

「お前ら・・・いやこれは言わない方がいいな。」

この事実気づくのは俺だけでいい。そんなことを言いたげなとても悲しい声で小さくそう呟いた。

「今は授業中じゃないから別に騒ぐのは構わないがハメは外し過ぎるなよ」

暴走する4人に対し俺は警告だけはしておく。しまったな、こいつらに静かにしてもらわないと話が進まない。何か方法は無い？俺は目で流に尋ねた。

だが流は首を横に振るだけだった。

「おはようございます」

暴走する4人を生温かく見守っていると教室の入り口から俺の天敵の声が聞こえてきた、

「ちょっと、あんたたちうっさいわよ！！お姉さまの可憐な声が好きとりづらいじゃない！！！！」

クラスの女子（性格には他クラスの女子もかなり多い）が奇声をあげ続ける4人に制裁を加える。

「ヒギヤツ!?!」

「ウボフ!?!」

「アア、モットオ!?!」

「我々の業界では御褒美です!?!」

「ちょっとつらやましいな」

「お前さすがにそれは引くぞ」

女子軍団に集団暴行を恍惚な表情で受ける4人から少し離れたところで俺は流とはなす。

「それで結局何の用だったんだ?」

「ああ、さっき言っていた通り彼女を幼馴染に寝とられてな、お前らと同じ道を行ってみようかと」

「なら普通の深夜アニメでも見ていたほうがいいぞ。」

「それは既にチェック済みだ、2人目の彼女を寝とられた時からな」

「乙」

俺と流は授業のチャイムが鳴るまで目の前の光景をぼーっと眺めていた。

だが、目の前の光景のおかげで女って怖いなということを実際に認識することができた、現実に対する未練が減った気がする。

「隆盛君少しいい?」

昼休み、今日は一人になりたいからという理由で拘束を破り、屋上で弁当を食べるか、拘束を破らずにトイレへと行きたいところだが、ほかの生徒の手ながら鞆から弁当を取り出すさなか俺は、空に声てんてきをかけられた。

「何の用ですか?生徒会長」

全ての感情を押し殺し、笑顔を受けべる。できることならばこいつを無視して屋上かトイレへと行きたいところだが、ほかの生徒の手前そんなことはできない。

もしこいつを無視したとなれば、おそらく学校中の女子から私刑しんちにあうだろう。

「生徒会の仕事のことなんだけど、」

「ああ、それでしたら大丈夫ですよ、大体は終わらせておきましたし残っている仕事も今日中に終わる予定なので明日最終確認をしてくだされば結構ですので生徒会長はいつも通りのお仕事たぶらかしをお願いします」

お前が仕事をやんねえから俺がやってんだよ、しかも書記とかほかの子も全員女子でお前に骨抜きにされてるから全部俺の仕事になつてんだよ。

お前はもう仕事するな、邪魔だから生徒会室の奥の部屋に閉じこもってよろしくやってろ。

実際に声にだしている建前とは裏腹に心の中では毒づく。

「分かりました、今日中には終わらせておきますので明日最終確認をお願いします」

そこで俺は話を打ち切り、机に出した弁当を手に持ち教室の外へ向かう。

気分が良い、空に勝つということはこうも俺に爽快感を与えてくれるというのか、今なら空だって飛べるような気がする。

俺は足取り軽く階段を上ってゆき、この先生徒進入禁止と書かれたプレートを無視して屋上の扉を開けた。

空が青い、新鮮な空気に肺が満たされる。ああ、今日はなんて素晴らしい日なのだろう。

・・・いつになったら召喚されるの？（後書き）

隆盛に花を持たせてみた。見返すには程遠いがこれで十二分に満足している隆盛はすでに空に負けているのではないか？だとかそんなことを言っではいけません

後2話位で召喚させたい(前書き)

そのせいであまりふざけられなかったです、申し訳ありません。

後2話位で召喚させたい

「ほほう、隆盛氏の趣味に会いそうなものをこれかな」

放課後、俺は雄吾と教室の隅でこっそりと話していた。

雄吾の手には一つのCDケースがある。残念ながらその中身を確認することはできないが見られたら色々とまずいので好都合だ。

俺が何をしているかって？いやさ、仮想世界の女の子って裏切らないじゃん？裏切られても最終的にはハッピーエンドじゃん？

・・・え？バットエンドも結構あるって？いや俺やるのそういう類じゃないから。信頼と実績の萌えゲーだから。

「じゃ、生徒会がんばって」

「ああ、助かるよ。これで俺はしばらく耐えられそうだよ」

雄吾からCDケースを受け取り、すぐさま鞆の中にしまい教室を出る。目指す先は生徒会室・・・に書類を取りに行き、近くにある放送室を借りてそこで仕事だ。

この物語に登場する人物はみな18歳以上です、年齢については明言されていないので何があるうとも18歳以上という言い訳を続けます。ツッコミはいらんよ

雄吾からCD・・・いや正確にはDVDを受け取ると俺は生徒会室に急ぐ。理由は空も生徒会室にいるからだ。

仕事は全て俺に投げ、奥の部屋でしっぽりとやっている空。生徒会室の奥の部屋でやっているのおなじ部屋というわけではないが、生徒会室に入るということが非常に気まずいのだ。

わずかに漏れる喘ぎ声。もしその声の主が俺を振った元カノだった場合俺の心はずたずたに引き裂かれる。

故に俺は生徒会室に急ぐ、奴らの情事が始まる前に行けば、俺は何を気にすることもなく書類を取り、放送室へと向かうことができる。逆に既に始まっていれば俺は非常に気まずい中生徒会室に入らねばならない。

・・・いつそ始まっていたらサボりがいいところだが、既に昼休みに明日完成させた書類を渡すことを言ってしまったている。もしこれを破れば恐ろしいことが待ち受けているに違いない。

前に一度破ったことがあるがその時は俺の部屋の家宅捜査を受けた。もちろん抵抗したが、空の側近に俺の妹が空に賛同しやがったせいで俺は椅子に縛られ、物色されていく俺の部屋フレイベートルムを見ることになった。俺だって思春期の青年なんだ、当然その類は持っている。だがそれは物質ではなく電子的にだ。つまりは中身はPC。

当然パスワードはかけてある・・・が破られた、そこからは正に公開処刑だった。

ー！ー！いつそ殺せ！！！そう叫びたかったが口にはガムテープを張られ、んーっんーっ！！とくぐもった声しか出ない。目の前が滲む、俺は泣いた。

さらに追い打ちをかけるかのように、入っているデータの名前を一つ一つ読み上げ、感想を述べて行った。俺の心はもはや修復不可能なレベルにまで追い込まれた。

あんな悲劇はもう二度と起こさないし起こさせない！！！！

その決意・・・もとい服従を受け入れた俺は走る。少しでも俺の心の平穏を保つために。

結果？・・・聞くだけ野暮なものだよ。無駄だったよ。初々しい初めての娘だったら間に合ったかもしれないけど今日のお相手は生徒会の一人だったんだ。

間に合うわけがなかったんだ。俺は気まずい思いをしながら生徒会室に入り必要なものだけとるとすぐに生徒会室を後にした。

「オオウ、これは隆盛氏奇遇ですな、隆盛氏はもはや我らの同志、誰もいない放送室なんかよりも我らコンピューター同好会へ来ぬでござらぬか？」

「え、遠慮しておくよ」

コンピューター同好会・・・通称魔窟、ここには政一みたいな奴が集まると聞く。正直俺にはこいつだけでお腹いっぱいだ。

「ぬあくに安心したまえ、私らは君の邪魔をするわけではない、それとも副生徒会長殿は噂を信じ、そのもの自体を見ずに毛嫌いする性質かね？」

政一の言葉に若干引きながら答えると後ろから正にラスボスといった重厚感あふれるテノールボイスで話しかけられた。

俺の後ろのいる者の正体それは隣のクラスの通称魔王とよばれる身長190cmオーバー顔もかなりの老け顔で声にも迫力があり、さらには何かしらの武道をやっているという学校内において最強に最

も近いと言われている男、若槻わかつき力哉りきや

さらに不良は問答無用でたたきのめし、困った人は見捨てられないお人よしとかなりいい奴。俺も何度か彼女寝とられ時に相談しようかと思っただが、あまりの漢らしさに薔薇の道に行ってしまうそうだったのでやめた。

実際に彼女に振られたことを相談したやつが道を踏み外し薔薇の道をいったと聞いたことがある。ちなみに好きな教科は家庭科、趣味は裁縫だそうだ、初見の人は絶対に嘘だと思っただろうが本当のことだまあ、こいつ自体は非常にいい奴なのだが、こいつには非常に困った趣味がある。

こいつの趣味は裁縫なのだが・・・それは服を作れるレベルだ。さらにこいつが作るものはやたらとフリフリがついたりだとか、そんなかわいい女の子が着るような類のものが多い。

ここからが問題だ、いや上記でもちよつと問題がありそうだが、今から語る問題の前ではその程度は塵芥程度の問題が。

さあ、ここまで語っておきながら僕は一度たりとも着る対象のことについては触れていない。勘のいい人はここですでお気づきだろう。

着るのだ・・・作った本人が。学校で、部活中に。後はもう何も語るまい。

さて、今日の彼の服装は・・・冥土メイドか。なかなか恐ろしいものを見た。

そしてさっきのあなたの台詞俺のこの目で見た正当な評価だよ。お前らは問題は起こしてないけど、その存在は色々問題だということとを自覚してくれ。

「いや、いきなり部外者の俺が行くのもあれかなって思っただ。それに今からこれまとめないといけなから静かなところの方がいい

し」

俺は魔王の迫力にビビりつつも、手に持つ書類を見せる。

「なんだ、ならば私が手伝ってやろう、ぬぁに気にするな。たった今から私は貴様と友になったのだ。友とは助け合うもの、そうであるろう?」

「あ、うん、そうだね」

「よし、ならば貴様のいう静かな所へ連れて行ってもらおうか。政一よ私は今日部活に出れぬと皆に伝えておけ」

「魔王殿が来ぬとは寂しいでござるが、拙者らは魔王殿の優しいところにも救われているでござる。隆盛氏も我らと同じように救ってあげてほしいでござる」

政一はそう言って、ダッシュで逃げて行った。あいつは本心から言っているのだろうが行動は真逆だ、おれにこいつを押しつけやがった。

いくら性格が良い奴でもメイド服きた190cmのやたらガタイのいい奴とはいたくないよな。

そう思いながら、魔王に引きずられる俺だった。

「今日は助かったよ、ありがとう。」

完成した書類を揃えながら魔王に礼をいう。僕の目に映るのはメイ

ド服姿の魔王だ。彼女にこんな恰好をしてもらって尽くしてもらいたいなどと妄想するが、なぜか涙が出てきた。

「気にするな、私が好きでやったことだ」

魔王は素敵なダンディーボイスでそう答える。仕事はそんなになかったとはいえ一人でやっていては多少時間のかかるものだったが彼が手伝ってくれたおかげで予定よりもだいぶ早く終わった。

「では、気をつけて帰るのだな。私は私を待つ友の所へ行かねばならん。また困ったことがあれば気軽に声をかけてくれればよい」

そう言って魔王は豪快に笑いながら去っていった。

「帰ろうか」

去りゆく魔王の後ろ姿を見送り俺はそう呟いた。

後2話位で召喚させたい(後書き)

新キャラ?なんとなく出しただけですよ?

だけどおかしい、今回で今予定している次話のところまで進めるつもりだったんだ・・・何があった

さあ……やりたいことはやった……!! (前書き)

基本的に書き始めたら1日で1話書いているから勢いがなくなった
からおしまいでございます

「さあ！ーやりたいことはやった！ー！！！」

「最近のゲームの設定ってすごいな」

俺は雄吾から借りたゲームをPCにインストールし、しばらくやってからの感想がそれだった。

別に俺はこういう物の類を嫌っているわけではない、でなければラ
+ などやるわけもなかった。ましてはあそこまでハマるわけもな
かった。

どこまでいったのかは察してくれ、俺の黒歴史ゆえに語りたくはない。

さて、話は変わるが人間褒められることと怒られることと無視されることとどれが一番つらいか分かるだろうか？

答えは無視されることらしい。

今俺がやっているゲームはそんな全ての人から無視され続けた青年が心優しき（爆笑）御主人様達（ただしDS）に拾われ、教育・・・じゃなくて調教もとい玩具として扱われる非人道的極まりない物語だった。

主人公は拾ってくれた御主人様達のDS心を満たすために散々無茶なことやらされるわけだけど、それは主人公にとって辛いものではなく当たり前のものにならなくなっていくわけだよ。

例えばどんな生活をしていようとまあかの生活を知らなければそれが当たり前、人間はいかに自分の主観のみで生きているかとか俺はもう泣かすにはいられなかったよ。

それにいくら当たり前の日常とは言え鞭で打たれば痛い、その痛みに耐えるために主人公はDMに目覚めたり、何かしらの罰を与

えられなければ主人公にとって一日が始まらないくらいな物になってくんだよ。

罰とはいってもこれは主人公にとっては御主人様からの愛情表現みたいなものだし、御主人様達にとってはドS心を満たすための玩具。もう、ほんとに涙が止まらない。

そんな救いようのない展開だったが、俺はこのゲームを持って学んだ。

人は一人では生きてはいけない、それは親がいなければ生まれてこれないし、育ててくれる者もない。たとえどんなひどい扱いを受けようが育ててくれる者がいなければ、生きることすらできない。生きていられるだけで幸せそう思う人もいれば生まれてこなければよかっただなんて思っている人もいる。

もし、後者のように考えている人がいるのなら少しでもいいから考えてほしい。

――あなたは今まで生きてきた中で幸せを感じることがありましたか？ と。

もしあなたが生まれてこなければその幸せを感じることもすらできなかったのだと、あなたの現状が他人から見れば幸せに思える立場にいるのかもしれないのだと。

もちろんあなた自身のことを他人が理解できるはずもない、だからこそ言わせてほしい、あなたも他人を理解できないのだと。

そんな風に終わってくればよかったな。って本当に思います、はい。

いや、そんな綺麗にこのゲームが終わるなんてことはなく、絶賛プレイ中です。でも俺は今すぐにでも閉じようかと思えます。俺のPCに映るのは主人公と犬と蛇のCG・・・一枚絵だ。

ああ、先に言うておくが俺は18歳以上だ。この一言で今俺が何を見ているのか大体分かるだろうから、それを察して数行を飛ばしてほしい。

「あれ？おかしいな？俺が借りたのはいわゆる萌えゲーだったはずだぞ。ディスクに描かれていた絵から違うとは思っていたけどこれは流石にないぞ。あいつらとはやっぱり距離を置くべきだよな？」

俺は後悔した、このゲームをインストールしたことに。そしてプレイしてしまったことに。俺はもう雄吾のことをまともに見れそうにない。

目の前のCGでは少年”が”犬を犯している・・・現実にはこのようなことはないだろうがこれはゲームだ。だが誰得？そして少年の後ろには蛇が突っ込まれている、詳細に語るにはこの場は不適切だと思われるのでこれ以上は割愛しよう。

マジで誰得？ねえ、なんでこんな展開があるの？きつと需要があるからこんなシーンがあるのだよな？疑問は尽きない。

俺は自分の部屋でゲームの感想・・・まあ途中だがあまりの展開に一旦画面をそのままにして一人感想を述べていた。

もちろん部屋には鍵をかけてあるし、音漏れもないようにイヤホンを装着済みだ。

だからこそ油断していた。人はいくら話で聞いていても実際に体験しない限り本当の意味で学んだということにはならない、偶になるようなやつもいるだろうが（主に俺の幼馴染とか）そんな奴は本当に稀だ。

もちろん俺も前者であり、まさかこのような事態に陥るとは思っていなかった。

・・・話しが分かりにくい？簡潔にまとめよう、空が俺の部屋をピッキングで解錠し、部屋に乱入してきた。

「隆盛君？少しお話したいことがあるのだけれども」

もちろんどこに耳があるかもわからないので、猫を被ってだ。

突然の侵入者に固まる俺をよそに、空は素早く扉を閉め、鍵をかける。これで俺の逃げ場はなくなった。扉を開く際に解錠するという一手間をこいつが与えてくれるはずもない。

・・・そろそろこいつ殴ってもいいよね？俺キレてもいいよね？俺よく頑張ったよね。今まで最低限のプライバシー（部屋に侵入しない）を守ってくれていた守ってくれていたからなんとか耐えられたけど侵入されたっことは俺の安楽の地がなくなっただけだ。だよ。だが、俺はこの場を動くわけにはいかない、俺が今動いてしまえば俺が今体で隠しているデスクトップが見えてしまうからだ。

「会いに来てやったぞ隆盛。よろこべ、美少女が何も持たずに無警戒に男の部屋に入ってきたのだ、これは襲うしかないだろう」

俺には（物理的に）俺が襲われ、一方的に蹂躪されていく様しか浮

かびあがりません。

「ん、なんだその顔は。まるでアダルトな本が親に見つかった時の中学生のようだぞ。」

無駄に鋭いな。俺は空の観察眼に感服する。

「ああ、安心しろ。私はその程度では軽蔑などしない。」

そういう空の顔はすごく楽しそうだ。おそらくしばらく俺をからかうネタとして使いつもりだろう。

「い、いやこれちgo」

「なに、見せてみる。」

焦る俺に余裕の表情で近寄ってくる空。俺は焦りと恐怖により混乱状態に陥る。

「ハアツ!!!!セイツ!!!!!!」

混乱状態に陥った俺は証拠隠滅を図るべく、空に向かって殴りかか。だが、平常心を失っている俺にまともな喧嘩ができるはずもない。

まずは最初に渾身の太ぶり一発、ハアツという掛け声とともに風を切る音が聞こえてきそうな勢いで空に繰り出されるが、それは余裕を持ってかわされる、だが、その程度は読んでいる、セイツ俺は叫び勢いのままに蹴りを放つ。

「その焦りよう、よほどのものを隠しているのだな」

空は俺の渾身の2連撃を避けると、無防備な俺の顎に一発パンチを放つ。

それは俺の攻撃とは言え、無駄な力を完全に廃止し、必要最低限の威力しかもたないものだだったが、顎にパンチが当たった瞬間に視界が・・・世界が揺れ俺の意識は闇に沈んだ。

「・・・え？なにこれ」

今にも消えそうな意識の中で空の言葉が聞こえた

「痛っ」

意識を失ってどれくらいたったのだろうか？意識を取り戻した俺の視線の先には空の顔があった。頭にはなにから柔らかい感触、どうやら寝かされているようで空の後ろには天井が見える。

意識ははつきりとはしないが頭を動かし、周囲の確認をする。左、俺の部屋壁が見える。右目の前に何かがあり、何も見えない。・・・おそらくこれは女子の制服だろう、空は確か制服で俺の部屋に訪れた。

ここまで考えが至ったところで急速に俺は自体を理解していく。

俺は空に膝枕をされていた？・・・考えるだけでもぞつとする。恐ろしい後で何を要求されるかわからない。

・・・いやそれだけではない、確実に見られた。画面が・・・PCのデスクトップにフルスクリーンで映し出されていたあの画像が。

俺は急いで体ごと左に回転させ、空の膝上から逃れる。吐き気がするほどに気持ちが悪い、いや感触自体は大変良かったのだが、心が拒否した。

「ああ、いや、なんだすまない、まさか私がお前の彼女をとったせいで獣k「違えよ!？」いや、でもあれはj「そんな単語どこで知ったよ!？」」

空は非常に申し訳なさそうな顔で俺に謝ってきた。謝罪の言葉は受け取るが、説明はいらぬ。必死に言葉を被せる俺。

「でも大丈夫だ。私はお前の幼馴染だから・・・な？お前が正常に戻るまでいつしよにいてやるから、な？」

空は俺が精神病を患っている人と接するかのようには相手を肯定し受け入れるような言葉をかけてくる。がそれは非常に辛い。それに微妙に幼馴染つてところに疑問符付けてないか？いつそのこと無理に受け入れようとせず縁を切れよ。そっちの方が俺は救われるんだから

「それと、私は女生徒に猫耳と尻尾を付けてニャーニャー言わせるプレイとかその類が大好きだ。それでちょっと研究しているときにな」

こいつは俺の心をどこまで抉りたい？彼女自慢？ねえ俺の元カノともそんなプレイしたわけ？まだキスしかしてなかったんだよ俺達、お前は1日で俺を抜き去ったの？

「だが、流石に本物の無いと思う。」

「勘違いだ・・・もう否定したところ無意味だろうが違つんだ。」

俺は蚊の鳴くような声で嗚咽とともにそう呟く。それは誰に届くわ

けもなかったが自分への慰めにはなった。

ああ、明日も学校だ。雄吾にはどんな復讐をすればいいば俺の心の傷に見合う心的外傷トラウマを植え付けられるだろうか。

さあー！やりたいことはやったー！！！！（後書き）

5話たっても召喚されない異世界召喚（笑）ファンタジーです。

力量不足を感じる今日この頃（前書き）

前々から感じてたけどさ。

相変わらずのツッコミどころしかない物語

やっとあらすじの4分の3がおわったかな？

力量不足を感じる今日この頃

「今日もまた憂鬱な一日が始まる」

俺はふと替え歌を思いつき、口ずさむ。元曲は某ボーカロイドのネギ好きのあの人のあの曲だ。

朝目が覚めて 真っ先に思い浮かぶ空のこと 思い切り殴って 跪かせたい ただ謝ってほしくて

白の制服 眩しい笑顔 そしてその裏側 今日もおれは返り討ち！！

世界 消えてなくなれー 死んでくれなんて 絶対に言えない それに 空と 目も合わせたくない

空に恋なんてできない おれは だって彼女を 寝とられた。

さて、こんな音程もリズムも全く合っていない、人に聞かれたらベツトにもだえるようなことは置いといて学校行きますか。

（学校）

俺はいかに雄吾に社会的制裁を加えようかと机に突っ伏しならどん底のテンションで考えていた。

テンションが低い理由は昨日のあれだ。空に勘違いされた・・・の

は別にどうでもいい。むしろこれで距離をとってくればいかよくなる誇りも受け入れよう。だが、あれを見られたというのは精神的にショックがでかい、でかすぎる。

「コンピューターの内部的破壊・・・外部的破壊・・・ウイルス・・・データ流出・・・クククどれが良いだろうな」

想像しただけでも心が躍る、俺の苦しみとはベクトルが違うが同じような喪失感はあるはずだ。

以前に空にひと泡吹かせようと色々学んでみたが、やつの子のセキユリティが硬すぎた。もう少しで逆探知されかねなかった。

「隆盛君少しいい？」

俺が近い未来を夢想し、ニタニタと机に向けて怪しい笑いを受けべっていると空が話しかけてきた。俺は空の顔を見ないで言葉を返す。

「何でしょうか、生徒会長？」

「昨日、隆盛君から受け取った書類のことだけど」

・・・ああそついえは鞆の中から消えていたな。帰り際に持っていたのだろうか。どん底状態を作りだした元凶と関わりたくもないが、立場というものもある。断るわけにもいかないだろう。

「すみません、少し体調が悪くて後にしてもらえますか？」

理由がなければ作ればいいじゃない、断るわけにはいかない？なんだいそれは。今まで散々耐えてきたんだ。

俺はそういつて断る。若干空の顔が引きつったが、一瞬後になぜか聖母のごとき頬笑みを受けべる。それはまさに俺が精神病者でそれを介護する人のごとき微笑み。すべてを受け入れるかのような温かさ？だ

「大丈夫？もし辛いようなら保健室で休んだ方がいいですよ」

保健室で休む・・・それは授業を休むという代償を払い、こいつから逃れられる。俺はその欲望に負け、弱々しい声で言葉を発した。

「そうですね、すみませんが少し休んできます。先生に伝えておいてください」

俺はそう言つて力なく立ちあがる、歩く際に少しふらつくが周りを意識していればぶつかることもないだろう。

・・・だが、今の俺の体調を一瞬で回復する方法が俺にはある。病は気からという言葉がある様にある程度のことには気の持ちようでなんとかなるものだ。

——人は正の感情と不の感情どちらの方が持ちやすいか強いかと例えば俺は断然後者だと考える。そして俺にはその不の感情をぶつける相手がいる。

「すまない。雄吾君。保健室まで付き合ってくれないか」

弱々しそうな笑み、それでいて内に秘めるは悪魔のごとし非情さ・・・俺は雄吾に物理的な暴力は振るわない。ただ心をへし折り、その折れた心をさらにへし折り粉々にするだけだ。

「あ、ああ。すまん政一、ちょっといつてくる」

雄吾はこれから起こることを全く予知せずにも通りの表情でこちらに向かつてくる。

俺が教室に戻ってきたのは昼休みになってからだった。余談だが雄吾は放課後に魔王に保護されたそうだ。何があつたのかは語らないがおそらく残りの人生トラウマを抱えながら生きていくことになつただらう。

そして放課後……のさらに生徒会の仕事を終えた後。

今日は珍しく……本当に珍しく生徒会に所属してから約半年今まで数えられるほどにしかなかった本当に珍しい現象が起こつた。珍しいを使いすぎたり色々分がおかしかったりもするがそれほどのことだつたのだ。

今日は、空が生徒会の仕事をまじめにやった。ほかのやつら?……全員奥の部屋で慰め合つてたよ。外から鍵をかけて脱出不可能にして餓死させたいのと思つたのは俺だけじゃないはず。

「本当にすまない、私はお前がそこまで悩んで……いや墜ちているとは思ってなかつたんだ」

そして、仕事を終えた俺は空と一緒に下校している。本当は拒否り

たかつたのだが、それを許してくれなかった。具体的にいうと腕を組まれた。

羨ましい？ふざけんな俺にとっては水銀スイッチつきの爆弾、もしくは二ト口抱えているようなもんなんだよ。それにここまで読んでくれている方々は俺のことを羨ましいとは思わないはずだ。信じてるぜみんな。

メタ発言？気にすんな。

そしてこやつは無自覚で人の心をえぐってくる。

「ならもう俺に関わらないくださいます、かなり本気でお願いします」

今まで散々俺を苛めてきたこいつに遠慮など不要、気にすんな何ていってみる余計ひどくなるわ。

「そうか、今まで私のことを疎ましく思っていたのだな」

「うんとっても、むしろそう思わないやつは聖人君子以外の何者でもねえ」

空は俺の言葉に落ち込んだようなしぐさを見せ尋ねてくる、俺はそれにとつてもいい笑顔でうなづく。こいつに対しての良心？そんなもの既に擦り切れてなくなつたわ

「私たち・・・やり直せないのか」

「やり直したくないです」

空はより一層悲しそうな声で尋ねる、その眼はまるで捨てられた子犬のようだ・・・だが俺は本能というべきところで何か違和感を感じ

じた。

俺には相手の嘘を見抜いたりする力はない、空の目を見ても演技をしているようには思えない、正に捨てられた子犬の目そのものだ。だが、だが考えてみる？こいつは俺がいなくなっただけでそんな思いをするだろうか？確かにこいつと俺は幼馴染だ。ほかにそう呼べる者はいない。

しかし、裏を返せばそれだけの関係だ。それがあつたからこそ俺は今までの理不尽に耐えてきたし耐えられてきた。

こいつの周りにはいわゆるイエスマンしかない・・・まあこいつは間違つたことはいつてないしそれは仕方ないことだ。例外があるとすれば俺に対する理不尽だけだ。

俺もできるだけこいつの意識から外れるようにイエスマンを演じてきた。常にこいつ死なねえかなとか死ね！！とかは思ってきたがそれを悟らたということは無かった。

――俺がそこまで考えたところで不意にいつもの空の声が聞こえた。

「残念・・・いやむしろ喜ばしいことだ。私の周りには常に私に好意を持つ者と関わらないものしかいなかったからな。」

空の言葉の前半を聞いた瞬間に狂喜乱舞し後半を聞いてた瞬間に絶望した。

「隆盛お前が幼馴染で、腐れ縁なことを嬉しく思うよ。」

「俺は思わん、むしろ俺の平凡に過ごす予定だった人生返せ」

いちいち返すあたり、もはや諦めていえるのだろうか？

自分自身のこれからに絶望していると空が俺に向かって手を差し出してくる。

「これからもよろしく頼むよ、幼馴染。」

俺はそれを無言で弾く。

「それと黙k「お願いもうやめて!?!?」の趣味が治るまではいやがろうとも一緒にいてやる。私のせいだろうからな・・・いや私に惚れさせるというのも面白そうだ」

「そんなアブノーマルな趣味ねえよ!!!そしてすべての元凶のお前に惚れることは絶対がない、もうどこかいつてくさいお願いします!!!」

俺がそう叫んだ瞬間に奇跡が起こった。

「――それは非現実な出来事。ファンタジー」

何の変哲もない道路が急に発光した、いや光っているのは地面ではなくその地面がある空間・・・空の足元だ。空の足元を中心に光が渦を巻く。

俺は直感的に理解した・・・テンプレートだ。ネット小説などによくある異世界召喚物のそれだと。いや、実際には違うと俺の常識が言っているが、こいつから逃れられるならありえないことだろうと信じてやる!!!

むりやり状況を脳に理解させた俺の行動は早かった。突然の地面の発光に驚きその場を退避しようとする空の背中を押し、光の中心へとおいやり体勢を崩させる。

「これはテンプレートだ!!!巻き込まれ型ファンタジー小説によくありそうな異世界召喚系のあれだ!!!」

俺は光の中心で地面に手をつき体制を整えようとする空に叫ぶ。

「ならばお前も道連れだ！！！！」

「巻き込むなあ！！！！」

俺は空を侮っていた、一瞬で体勢を整えた空は俺に向かって跳躍！俺を道連れにしようとする。だが光の渦は対象者・・・空を逃がしたくないようだ。光の渦から光で形作られた腕が空をとらえようとする。

それはまさに俺を助けようとする意志のように俺は感じた。もちろん妄想。

俺はそれに勇気づけられ、空の手を弾く。

「なッ！？」

まさか弾かれるとは思ってなかったのだろう、驚愕の表情を受けべた空は次の瞬間に光の腕に捕えられた。

「俺にかまわず先に行け！！！！」

俺は自然とそう叫んでいた。理由は何となくだ。

俺がそう叫んだ瞬間に空は笑った・・・いや嗤った。

「お前のいうことが本当だったら私は絶対にお前にこっちに来させてやる！それまでにその獣k「違えから！！！！」好きを治しておけ」

空は俺の言葉に返すようにそう叫び、次の瞬間に消えた・・・文字通り消えた。

「俺は絶対に行かねえけどな」

空が消えた地面を見つめ、おれは決意を込めそう呟いた。

力量不足を感じる今日この頃（後書き）

主人公が救済された1話

みるか。

俺は懐から携帯を取り出し、番号を押そうとしたところで指を止める。

まずはやるべきことがあった。

「勝ったア！！！！俺は運命に打ち勝った！！！！！！神よ！！俺は貴様を超えた！！！！貴様の用意した運命なんて打ち破り俺はここに一人でいる！！！！！！！！！！」

何をやっているかという一人カラオケボックスに入って叫んでいる。普通に外だろうと家だろうと叫べば変な目で見られるがカラオケならば大丈夫だろう。

それにここで時間を潰すということにも意味がある。いや、そんな理由などどうでもいい。ただひたすらに喜ぼう、解放されたことを。。。

「あ・・・マシタ」

数時間後俺は叫びすぎたな、と心の中で反省しカラオケ店を後にした。そしてその足で空の家へと向かう。

「そ・はかえつて・・・せんか？」

まさか、こんなところで声がかれたのが役に立つとは思わなかった。空の母親は何を勘違いしたのか俺の声が枯れているのが空を探して叫び続けたからだと勝手に解釈してくれた。

事情の説明としては空が目を離れたすきに一瞬で目の前から消えたということにした。地面が発光したただなんて到底説明できないが、いきなり消えたのなら神隠しにあったとかそんな一瞬で説明でき

る便利な言葉があるからだ。非化学な妄想なのは変わりないけど

どうでもいいことだが、空の母親もかなり美人です、説明はめんどいから省くとしてとても一児の母親・・・s「何かいいましたか？」
・・・なんでもないです」

「とても信じられない話しかけど隆盛君は嘘をつく子じゃないものね、警察には連絡したの？」

「・・・」

俺は首を横に振る、喋らないのは喉が辛いからだ。人というのは盲目な生き物で一度信じたものはなかなか疑わないものだ。勝手に勘違いしてくれてスムーズにい話が進むのは嬉しいことだ。

・・・俺が悪いわけじゃないんだ、俺は決してだましてなんかいない。それに今の俺にはこの人を落ちつけるだけの喉のライフも残っていない。

「でも、空のことだし今日中には帰ってくると思うわ、明日になっても返ってこなかったら警察に連絡するわ、隆盛君も疲れたでしょう？帰ってゆっくりと寝なさい」

おばさんの言葉に俺は視線を俯かせ納得がicanaそうにうなずく。自分ではどうしようもないのだ。いくら探したとしても消えた人間が突然現れるなんてことはほぼありえない。

「し・れい・す」

かすれた声で俺は退出の意を伝え、空の家を後にする。

「ア　ゲホツゲホツ！？八八八ゲホツ！？！？」
俺は空の家から帰るなりベッドにダイブそして笑う・・・が喉に激しくダメージを負う、こんなのは俺のキャラじゃないし、いくら目の前から空が消えたとはいえ本当に異世界に召喚されたなんてファンタジーなことが起きているとは流石に信じ切ってはいない。だがそれでも信じたいのだ。俺は解放されたのだと。

翌日、空が学校に来ないということでも多少騒がしくも会ったが、特に何かあるわけでもなく過ぎた
顔がゆるんでしまうのををこらえるのに必死だったというのはいうまでもないことだろう。

問題は翌日・・・空が消えてから二日目、空の失踪が発覚して初日だった。

「ねえ、空様私たちをおいてどこに行っちゃったのかな？」

「お姉さまが私たちをおいてどこかへ行ってしまっなんてありえないわ、きっとやむにやまれぬ事情があるのよ。だから私たちは信じて待ちましよう。」

学園の生徒の大半は空が失踪したことの話題で盛り上がっている、空の影響力はここまで大きいものだったのかと不思議に思うが、外見と外面だけはやたらにいいのでそれも仕方ないかとも思う。かくいう俺も空と幼馴染でなく、接点のない関係ならば空に憧れて

いただろう。おれもその大多数の人たちになりたかったな、今となつてはどうでもいいことだが、ふとそう思う。いや、既に俺はその大多数の人になつたのだ。

・・・なつたはずだったが、それはまだ数カ月ほど先のことになりそうである。

「なんで空様についていながら空様がどっかいつちやつたのよ！！！！」

「なんで空様から目を離れたのよ！！！！なんで空様が消えちゃつたのよ！！！！あんたが消えればよかつたのに！！！！！！」

今現在俺の目の前で叫ぶ女生徒が数名、うざい。

「・・・」めんなさい

俺は全く悪くないが、謝罪を告げる。流石の俺でも彼女らの気持ちがあく分らないほど他人に理解がないわけでもない。

彼女らは現実という名の一方的な理不尽のはけ口が欲しいだけなのだ。そしてその対象がその時空の近くにいた俺だっただけという話理解はできるがこの上なくうざい。

もし反論が許されるならば問いたい、俺と全く同じ状況下において、絶対に空を助けさせたという保証を持つてこれたのか？と

99%ではだめだ1%でも失敗の可能性があるのならば俺は全面的に悪いだろうが、絶対出ないならば俺を責める権利はこいつらにはない。

・・・誰だ空の背中を押して光の渦の中に追いやつただるとかいつたの。それさえなければ助けさせたかもしれませぬ、絶対にやらないけど。

だが、反論は許さない、先ほど言った通り絶対に空を助けさせたという証明することのできない証明ができない限り俺は心からの謝罪は絶対にしない・・・空の家族以外には。

とまあ、心の中で叫ぶのはいい加減にしておくとして、俺はいつまで目の前で泣き叫ぶこの女生徒たちを相手にしていればいいのだろう？

慰めてそのまま彼女にしちまえ？生憎と今は彼女寝とられたばかりで傷心中だ、あまりかかわりたくはない。

「落ちついてください、生徒会長はきつと帰ってきますよ。皆さんをおいてあの生徒会長がどこかへ消えるなんてあり得るわけないじゃないですか、ほらそろそろ授業が始まりますよ。生徒会長が返ってきた時に失望させないように勉強に励んでください。」

俺としては帰ってきてほしくない・・・むしろ空の最後の言葉が心に引っかかる、空ならやりかねないと。

地面が光つたら要注意するようにしておこう、そもそも地面が光るなんて非科学的なことが起こった時点で要注意だけだ。

その日は学校中の生徒・・・その大半が女子からの的外れの暴言を吐かれた以外は特に何事もなく終わった。

俺が女性と付き合うことは絶対にならないだろうと未来を予見できる日だった。

オンナッテコワイネ

「ええ、皆さまご存知の通り・・・というよりも先日の学校の騒ぎの原因ともなった現生徒会長 神宮司空さんが謎の失踪を遂げたこ

とについてですが・・・」

さらに翌日、緊急の全校集会が開かれた、内容はもちろん空のこと。警察も動くそうなので空を見つけようと自分勝手に暴走したり、学業をおろそかにしないようにとの何ともありきたりに感じてしまう内容だった。

校長先生の話を生徒全員が聞き流し、続いて最後に空を見た俺の話し・・・先ほどまで教師以外だれも目を向けていなかった壇上に俺が登った瞬間に殺気だった視線が何百も向けられる。

皆の眼は一樣に赤い、存分に泣いてきたのだろう、昨日よりはすっきりした顔のものが多いが、翌日になりやっと現実を受け入れたというものも少なからずいた。

「副生徒会長の斎藤隆盛です・・・」

俺も警察に話した通りのあたりさわりのないような非現実の話し・・・

・急に空が消えたことを話し、壇上から降りる。

学園中が空が消えたことに騒ぐ中、俺はいつも通りの日常、いつもよりも穏やかな日常を過ごす。

・・・相変わらず生徒会の仕事は俺一人だ、ほかのやつらは暴走気味に空を探すべく町を彷徨っている。

「あいつら仕事しろ・・・」

さて、次回（の主演）どうしようか（前書き）

それと今回も皆のヒロイン）笑）空が出ます。

さて、次回（の主役）どうしようか

カタカタカタ

俺はPCを打ちながらふと思う、

「あいつらいても作業効率変わんなくね？」

あいつらはまともに仕事をしてこなかった。いまさらやったところでたいして役に立たない。

いや、教えるべきこともあるのでむしろ時間がかかるかもしれない、俺たちの任期はもうそこまで長いとは言えない・・・よしあいつらいらね。

明日からも無駄な空の搜索を行ってもらおう・・・いや無駄じゃないな。生徒会がそれを率先してやっているおかげで暴走するバカどもも現れていないわけだし。

そしてそのおかげで俺はここで一人、気楽にできる。

コンコン

「どうぞー」

俺が明日からの予定を頭で組み立てていると、生徒会室のドアがノックされた。俺は一瞬にして顔を引き締める。

「私だ」

「お前だったのか」

「また騙s「それ以上は色々危ないから禁止」何を恐れる必要があるというのだね？」

ノックの主・・・魔王が生徒会室に入ってくる。

「何の用ですか？」

「なに、我が友の様子が少々周りと違っていたからな・・・いらぬおせっかいというやつだ。」

魔王の言葉に俺は魔王を見つめ返したいた目をそらす。

「私は話が友が悲しんでいれば、共にその悲しみを共有し、喜んでいればともに喜ぼう。そして話が友は今喜んでいる・・・責めているわけではない、むしろその逆だ。今苦しんでいるのだから？その喜びを共有できるものがいなくてな。」

「力哉さん！！」

俺は嬉しさのあまり、魔王に抱きつく。

「私も所詮は人・・・だから我が友の全てを許すわけにもいかぬ・・・だから私はこう言おう、よく今まで耐えたな。」

魔王は俺の頭を無骨な手でなでる、男が男に頭をなでられる・・・それも大の男がだ。見ていて気持ちのいいものではないかもしれないが今の俺には関係ない。

この人が魔王なんて呼ばれているなんて信じられないだ。

「俺は空が消えてくれてうれいんです、いままでずっとあいつのせいで苦汁をなめ続けてきた。それがいなくなって嬉しいんです。」

気づけば俺は今まで誰にも語ったことのない心情を話していた。

魔王はそれを静かに聞いていてくれた。前日のカラオケのせいで声

がかすれていたのは御愛嬌だ。

「ありがとうございます、力哉さんが話を聞いてくれたおかげですっきりしました」

「うむ、気にするな。私の好きでやったことだ。それと話が友もコンピュータ同好会へ来ぬか？もうすぐで生徒会も人気を終えるだろう、その時間を私らとともに過ごしてみないか？」

俺はこの人についていきたい・・・そう思う。俺は断じてホモではないがこの人についていきたいと思う。この気持ちは崇拜に似ているのかもしれない。

この人は俺を助けてくれた。誰にも打ち明けられない悩みを聞き、俺に光を与えてくれた。

「はい！！！」

俺は迷うことなく、頷いていた。コンピューター同好会のことを俺はよく知らない。この人たちの学校での行動はよく知っているが（悪い意味で目立つため）どんなことをしているのかは知らない。屈強な男がコスプレをして学校を歩いたり、勇者ごっこをして学校で遊んだり、なんかよくわからないものを学校に持ち込んできたりetc etc など問題行動を起しているが学生たちに”直接的には”迷惑はかけていない。

今までできなかったバカをやるのも楽しそうだな。そう思う。あまり長い間一緒にいることはないだろうがそれでも楽しそうだ。そうと決まれば、さっさと生徒会の仕事終わらせて、引き継ぎも早めに終わらせますか。

「ここは・・・どこだ？」

空は戸惑っていた、光の渦にのまれ、その直前に聞いたテンプレート・・・異世界召喚。景色は変わらず光に遮られ周囲の確認すらできないが、何かがずれたような感覚がした。

「――異世界召喚、空も、その類の話は知っている、何も知らない異世界の人を呼び出し魔王を倒す便利な道具にする・・・そして魔王を倒し用済みとなった勇者は人間に処分される。なんとも都合のいい道具だろう。何も知らない勇者は人間を守るために必死に戦い最終的にはその守ろうとした人間に殺される。」

そんなありえない夢物語（とはいっても結末を知らなければだが）を馬鹿正直に信じるわけでもないが全く信じないということもできなかった。

なぜなら地面が突然光ったのだから、そして光に飲まれた中で確かに聞こえた「世界を助けて」という謎の声、そして・・・。

そこまで考えていると光が徐々に薄くなり周囲の確認ができるようになった。空は光が消えていくとともに周囲を見渡す。

周りには十数名のいかにも魔法使いという格好をした顔まで隠れる

ようなフードつきのマントを被っている者たちが立っている。その中において一人だけ、違う格好をしている少女がいた。服装はいかにも貴族ですとでもいうかのように煌びやかなのだが、それ以上に素材が良かった。

肩のあたりまで伸びている薄い水色の髪に、慈愛に満ちた眼差し、顔立ちも整っていないながらもどこか幼い子もつ純粹さを醸し出している。

胸は大きいと言えないまでも決して小さくは無く、空好みの女の子だ。

空は自然と舌なめずりをした。空の足は自然と少女の方へと動いていた。

「動くな!!!」

空の周りを取り囲む魔術師たちは、迷うことなくその少女の方へと動き出した空に静止の声をかける。

ガッ!!

突然怒鳴られた空は、体を竦ませ、転んでしまう。転ぶ方向はもちろんその少女の方向、位置的にももちろんそのまま行けば抱きつく形になるような絶好位置^{ベストプレイス}

「キヤアッ」

少女は倒れてきた空を避けることができずに空ともども転んでしま

「んっ!？」

そして運悪く、空と少女の唇が重なる。空はこの機を逃すまいと少女の口の中に舌を入れ・・・省略

「貴様ア!!!王女様になにをする!!!!!!」

そしてその場は混沌と化した。

数時間後・・・空は赤い絨毯が敷かれ、部屋の装飾には黄金がふんだんに使われ、最奥には人が一人座るには大きすぎる赤い椅子・・・玉座のある部屋、つまりは玉座の間にいた。

部屋の周りには空に向けて隠そうともしない殺気を向ける兵士たち、空はそれを気にした風でもなく、王らしき人に向けて跪いていた。その王らしき者の隣には先ほど空と濃厚な女同士のキスをした王女が紅潮した顔でぼーっとしたどこか熱を込めた目で空を見つめていた。

(あの王女は、相当な温室育ちか、フッフ)

空は先ほどのキスを交わした時の反応から王女が、そうであると見破った。

先ほどの初心な反応を思い出し、空は知らずに舌なめずりをした

「〜であるからした〜」

王の言葉を軽く聞き流しながらも、重要そうなことだけは聞き逃さず空は考えていた。今のこと、そしてこれからのことを。

（あの王女を落とすには1日もあれば十分だ、問題はこの城の中に何人の私好みの女の子がいるかだ。そして私がここを出るまでに何人を落とせるか・・・）

空は魔王のことなど考えていなかった。いや、自身が負けるなどとは微塵も思っていなかった。流石に今のままでは勝てるとは思っていないが確実に魔王を倒せるだけの力は手に入れられると確信していた。

さらに話しを進めること1時間ほど、王の一人語りが終わりに、最後の仕上げとなった。

「貴殿は、勇者としての運命を受け入れる覚悟があるか？」

「はい」

「貴殿は、勇者としてその身を人のために尽くすと誓うか？」

「はい」

「貴殿は過酷な旅を制し魔王を倒す覚悟があるか？」

「はい」

「よろしい、ならば認めよう、貴殿はたった今から勇者となった。貴殿はたった今から我らの希望となったのだ。くれぐれもそのこと

を忘れず浅はかなまねはせぬように」

「はい、この命に懸けまして」

空は、勇者となることを受け入れた、それ以外に道は無かった、現状では誰かの庇護を受けるしか生きる術がなかった。最悪受け入れなければここで殺されていたかも知れない。

だが、空はそんなことを微塵も考えていなかった。そこまで考えていたかはわからないが、空はどちらにせよ勇者となることを受け入れるつもりでいた。

「ですが、いくつかのお願いがあります。よろしいでしょうか？」

「うむ、申してみよ」

王は、空が勇者を受け入れてくれたことい興奮しているのか、気分よく答えた。

「誠に申し訳ありませんが、私がいた世界では戦いなどない平和な世界でした。ですのでここではしばらくは戦いの訓練を受けたいのです。」

「うむ、それは当然じゃ、貴殿にはまずここで魔法についても学んでもらわねばならぬ。」

「それともう一つ、これはたいへん厚かましいものなのですがよろしいでしょうか？」

「余が承諾できるかは分からないが、申してみよ」

「私が勇者となったたつた今から私が手にいれた”モノ”は私のものと認め干渉をしないでいただきたい」

「どうということじゃ？」

王は空のいったことをうまく理解できなかつ、そう尋ねる。ここに隆盛がいればどうということか瞬時に理解できたであろう・・・絶対に王に対し助言はしないが。

「私が例えば冒険の最中”など”に手に入れた”モノ”などは、取り上げないでいただきたいということです。それとこれは承認してください”た瞬間からお願いしたい”」

「ふむ・・・」

王は、私が手に入れたものは私のもの、それをとるな、そう言うことだろうと判断した。

だが、この者が魔物の手から土地はどうなるのか？そう思った矢先、空は狙ったかのように次の言葉を話した。

「ですが、私が魔物の手から奪還した土地などに対してはその限りではありません、土地に関しては私はいません。」

この世界は魔物側と人間側で領土がわかれている。空は魔物側の王、魔王を倒すことが使命となったが、いきなり魔王と戦えるなどということはありえない。

魔物の領地を削っていき、最後に魔王を倒す。つまり空が魔物を倒し、魔物を追い出した土地は誰のものでもなくなるということ。

「いいじゃろう、余も貴殿の手に入れた物に関しては何も言わん、

それにしてもたった今からとはずいぶんせつかちじゃな」

「私でもそう思いますが性分ですので、それと今の言葉、承認と受け取ってよろしいですね？」

「無論、神と魔法に誓って」

こうして、空が地球から消え去った日、空は異世界で勇者となった。

さて、次回（の主役）どうしようか（後書き）

没ネタ

上の隆盛と魔王の会話

「はい！！！」

俺は迷うことなく、頷いていた。

「かかった」

魔王は誰にも聞こえないような小さな声で呟いた

「え、何かいいましたか？」

「何も言っておらんぞ」

てかこの没ネタのためだけにかいた。

それと空がこけたのはもちろんわざとです

もう、卒業（ゴール）してもいいよね（前書き）

何事もなく物語を終わらせたい隆盛からの切実なサブタイでした。

もう、卒業（ゴール）してもいいよね

「良くもおめおめとここにこれたものだな、副生徒会長殿？」

目の前に立つ、学生服を身にまとった、学生・・・低身長、学力はそこそこ、顔は・・・お世辞にも良いとは言えない学生が俺に敵意むき出しで睨みつけてくる。
こいつは放っておけばいいだろう。

「ああ、今日から時々ここに遊びに来させてもらうことになった、斉藤隆盛だ、みんなYOROSIKUな」

「歓迎するよ、隆盛君」

松林雄吾が俺を見て若干涙目になりながら歓迎してくれる・・・
保健室で些かやりすぎたか。

「べ、別にあんたなんかに来てほしいと思ってたわけじゃないんだからね、うれしいけど」ぼそっ

と、コンピュータ同好会の川城カワシユウ拳コブン・・・なぜけんにしなかった。
それと男がツンデレはやめてほしい、ツーカーアルツンデレは俺的に受け付けないな。

「デユハハ、これで斉藤氏も我らの同志というわけですな、デユクシ」

と鈴木政一、相変わらずそこはかたなくイラつく言葉をつける奴だ。

「よく来てくれた、私は歓迎する。こ（こ）（こ）に君の敵はいない、私の友は皆いい奴だ、共にいる期間は1年もないが良い思い出を作ってくれ」

と、若槻力哉・・・通称魔王。そして俺の尊敬するお方。ちなみに今日は白のワンピース、目に毒です。

これでコンピューター同好会は全員だ、えっ数が少ない？気にするな、個性的なキャラとか書けないから作者に縮小食らったんだよ！！！！

「さて、自己紹介も済んだことだ、なにか歓迎会をしようではないか」

「歓迎会か・・・じゃあついでにあいつの追悼会も兼ねるか、結局やってなかったし」

お通夜状態は勘弁してくれよ。というかいやがらせか・・・ええと名前なんだっけ？

「気にしなくともよい、名前など所詮は子を識別するための記号。故に名前自体には意味がない。本人がわかっていればそれで良いのだ」

あの、それって親かかものっそい抗議受けそうなんですけど？それと本人からも承認なく呼べば怒られませんか？いやでも魔王様の言葉だ、名前などに意味は無いのだから。

力哉様ばんざーい、魔王様ばんざーい！！！！

「じゃあ、やにぶな。」

「なんだよそれ！？ふざけんな！！！！というかどこからそれがでてきた俺にどんな関連性があるんだよ！！！」

「いや、ほんとにランダムで。なんとなく文字列出力させて目にとまったから」

「メタんな！！別に危険でも何でもないけどメタんな！！！」

先ほどから・・・いや最初からずっと俺に突っかかってくるこの背の低いやつは 谷川たにかわ 量貨りょうか・・・りょうかときいて漢字は違っても某凡将を思い浮かべた人は、一緒に柿ピーでも食べましょう。

「知ってんならちゃんと呼べよ！？最初は知らないとか言ってた癖によお！！！」

ちなみに、こいつは生徒会を嫌っている、理由は簡単空に告って振られたからだ、何も知らないでいられたんだからいいと思うんだけどな、やっぱ人間知らない方がいいってことも多いし、関わらない方がいいってことも多い。何も知らないからこそ嫉妬で俺たちのこと嫌ってんだろうし。

現実を押ししてたところで信じないだろうな・・・一種宗教の如き信者だし、空の。嫌っていながらも崇拜するなんという矛盾か。

まあ、空の百合趣味は知っているから何を持って崇拜できるのか全く分からない。アイドルみたいなものなのだろうが、手が届かないからこそ憧れる。そういえば俺はアイドルとか憧れたことないな・・・空という身近に猫を被るやつがいたからだろうか？彼女らの日常生活とかを想像するとすごく怖い。

「じゃあこれからよろしくな、雄吾、拳、やにぶ、政一、力哉様。」

「「「「「おう」デョフシ」べ、別にあなたな」ry」「「「「」

こうして、俺はコンピュータ同好会へはいった。仕事はほかの生徒会のやつらにも任せられないし、任せたくないからこちらの部屋でやるでしょう。生徒会の任期終了まであと2カ月、2ヶ月後には存分に遊べるようにしっかりと仕事しますか。

空の召喚された世界、王宮の庭

「ハアツ!!!」

キーン!!!

「まだまだ、甘い!!!」

空と一人の鎧をまとっている男性が剣の打ち合いをしている、正確に言えば男が空に健の稽古をつけているところだ。

まあ、そんなことは置いておいて、時間を進めようか。

「空様はいつ旅に出ていかれてしまうのです?」

しばしの稽古の後、体を休めるために芝生に倒れている空に一人の少女が近づいていく。薄い水色が髪 of 少女、名前はフルネームとかは省略してユーネだ。

「そうだな、だいたい3カ月もすればここを出ていくだろう。」

空は真剣な目でユーネを見つめた。ユーネは顔を真っ赤にして空から目をそむけた。

「目をそむけないで真剣に聞いてほしい、私はここを旅立つ時にユーネにもついてきてほしいと思っている。危険な旅だということは分かっている、君が王女で皆が君のことを大切に思っていることも知っている、だけど私はユーネと一緒に旅に出たい。」

「ついていきます!! 私は空様とならどこまでもついていきます!!」

・・・だめだこの国の王女、こいつに国政任せたら滅ぶぞ。空のいる国には現在王の子供はユーネしかいない・・・だがこんな己の欲求に素直な者に王は勤まるだろうか？答えは否、側近がしっかりしていれば大丈夫かもしれないが、この国の王は今すぐにでも新たな子供を作るべきかもしれない。

この後も空は順調にいろんな女性に手を出し順調に墮としていくのだが、これはまたいずれまた機会があれば。

これまた空と同じ世界の某所

「ジユジユ様！」

「なあに〜」

「例の召喚の魔法陣の件ですが、順調にいけばあと2カ月もあれば陣を敷くための準備も完了いたします！！！」

石で作られた壁に囲われた町からやや離れたところで、一人の少女と兵士が会話をしていた。少女の方はめんどくさそうに、兵士の方はかなり必死に話しかけている。

「それと町の外は危険です！！一刻も早く町の中へお戻りください！！！！」

「ええ〜、せっかくここまで来たのに〜」

少女は兵士の言葉に不服そうに返す。だが、兵士は引き下がらない。苦労人だな、こいつ。

「ジユジユ様！！！！お願いします、今我らにはジユジユ様しか頼れるお方がいないのです！！！！」

「全くしょうがないな〜」

兵士の必死の懇願が聞いたのか、それとも頼りになるのは私だけだと聞き、気分がよくなっているのかは分からないが、少女はニヤニヤしながら町の方へと歩き出す。

「ほら、早く帰るわよ」

少女は兵士にそう告げると、兵士をおいてさっさと行ってしまふ。だがこの兵士は幸せだろう、なぜなら隆盛とこれから旅に出るであろう空に振り回される人に比べれば、この少女はかなり扱いやすいのだから……。

「それで、例の魔法陣の発動はいつごろになるのでしょうか？」

「うーんと、大体3ヶ月後くらいになると思うよ。」

兵士は足早に去ってしまった少女に大きな声で問いかけるが、少女の小さな声では兵士の元までは届かなかった。

「無視ですか……そうですか、チクシヨウ」

少女の声を聞き取れなかった兵士はしばらく町の中でいじけていたとかいかなかったとか。

「何故だろうか？背筋に寒気が走った」

「フラグって知ってるか？」

「風邪なのだろう、早く帰り。体を休めるがいい。帰るのが辛いのであれば私がここで看病しよう」

上が雄吾、下が我らが魔王、力哉様だ。ちなみにロツカーからナース服を取り出しております。ああ、俺の目が腐りそうだよ。

いくら魔王教の俺とは言えやはりまだ耐えられないようだ、といひかなぜこいつらは耐えられるのだろうか？

「スマン、今日は帰って寝るとする、それと雄吾よフラグとは破壊クラッシュするためにあるものだ」

「は、早く帰りなさいよ！！俺たちに風邪をうつさないでくれ！！！それと今日は寒いから俺の上着かしてやるよ。」

バサツという音を立てて上着を投げてよこす拳・・・学校で指定の物があったはずだが・・・まあいいか、迷惑掛けているわけでもないし、俺も助かる。

「ありがと、じゃ俺は帰るよ」

俺は何か嫌な予感を感じ、家路を急いだ・・・何もなかった。

無駄なことを無駄に書く、そんな物語にしたい（前書き）

諸注意

話しの都合上というわけではないですが若干主人公の強さにチート補正を入れさせていただきます。お許しください。

無駄なことを無駄に書く、そんな物語にしたい

大体一ヶ月後

「ええ、これにて生徒会の引き継ぎを終え、新生徒会が発足するわけですが、ここで新生徒会の皆様に重要なお知らせをしなければなりません、今回生徒会の会長、副会長、書記など全員が立候補してくれたおかげで大変スムーズにここまでこれたのですが、生徒会を漫画やアニメの中と勘違いしないようにしてください、なので権力など一切ありません。あるのは雑用だけです。」

俺が新生徒会のメンバーに向けてそう言うと、体育館が笑いの渦で包まれた、新生徒会のメンバーも会長以外は笑っている、会長だけはorz状態になっている。所詮雑用だけだし周りが支えてくれれば大丈夫だろう。生徒会の仕事なんてそんなもんだ。

「それと、仕事は主に週に一回だけですが、一人が一週間毎日やっても終われる量です、だからといって一人に押し付けず全員でやっていってください、俺の代の時は実際にそうでしたので、そんなことが起きないように願うばかりです。」

俺はそこで一度言葉を止めて、元生徒会メンバーの方を見る。

「仕事といっても大変なものはありませんし、遅くまで残らされることはそうは無いので、”適度”に仲良くやっていってください。」

俺は適度という言葉を強調した、理由はきつとわかってきているだろう。

男子たるもの女の子に手を挙げてはいけません？世の中の理不尽の目の前ではそんなもの叫んだところで泣き寝入りせざるを得なくなるだけです。

俺は後先考えず角材を振りおろし、前のめりになった女子Aのふとももに思いつきりひざ蹴りを食らわせる。

「アゲツ！？」

女子Aは悲鳴をあげてその場に倒れ、苦痛に顔をゆがませながら、地面をのたうちまわる。これで残るは4人。

いくら相手が女とはいえ、4人しかも角材という武器を持っている、こちらに丸太があれば一掃できるが生憎と無手……。だがその分武器に振り回されることはない。

「くっ！？」

女子Aを倒すとすぐにB、C、D、Eの攻撃が迫る、一撃でも食らったらアウトだ、角材つて堅いし、角ばってるし、頭に当たったら一発KOだし、そのあと集団でリンチくらいそうだし。

……つまりは隙を作らないために一発も食らってはいけないということだ。なおかつ相手を倒す。

よし、今までの恨み存分にはらさせてもらう、顔は勘弁してやるよ、ばれたら怖いからな。

幸い……。とっていいのかわからないが、相手は正気を失っている、複雑な攻撃、フェイントだとか連携はしてこないだろう、各々が勝手に動くだけで攻撃を直線的だ。

逆に角材とかで柔軟動きされたらすごく怖いけどね。

さて、上の条件だけ書けば俺にいいことづくめなのかもしれない、だが、俺にとつては不幸なことだ、だってこいつら正気を失ってなければこんなことにならないかつたんだぞ!!!!

「おっと」

俺の目の前を角材が通り過ぎる、その威力はまさに一撃必殺、しかしその威力ゆえに隙は大きい、その隙をつきなんとか（日ごろの恨みを込め）反撃を仕掛けるがほかの3人にも注意を払わなくてはいけないためなかなかそのチャンスは訪れない。

一人でも減らせれば攻撃の余裕は生まれる。

一撃、二撃・・・何度もひたすらに攻撃を避け俺はチャンスをまっただ。

カーン！

そしてそのチャンスは訪れた、角材同士がぶつかり合う乾いた音が響く、CとEが同時に俺に攻撃を仕掛け、角材同士を衝突させたのだ、当然衝撃に耐えられなかったCとEは木材を落とす。

俺はすかさず、Eの眼鏡を奪い取り遠くは投げる、ついでにCとEの角材も。

そして訪れる今度はB続いてDの攻撃、俺はそれをよけ、武器を持たないCとEの太ももにひざ蹴りを食らわせる。残すはあと2人。

その後は何事もなく、スムーズに敵を無力化しことなきを得た。

結論、^{ジャンキー}空中毒者怖い、この世を^{せかい}さつてなお、俺を追い詰めるとは流石としか言いようがない。ついでに^{ジャンキー}中毒者どもがこいつらだけであることを切に願う。

扉をあけると、魔王様が、ゴスロリな服装を着て仁王立ちをしていた。

あまりの神々しさに血を吐いた。

無駄なことを無駄に書く、そんな物語にしたい（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。

なお、心優しきの方々は主人公許せん！！などとお怒りの方もいらつしやるでしょう。誠に申し訳ありません。

なお、基本的に主人公は暴力は振るいません、今はだいぶハイになっただけなんです、本当はいい子なんです・・・

バイト先で男女二人組とかで来る人たちをみて毎回思う、爆発しろ

「これを与えよう」

あまりの神々しさに直視できず膝をつくおれに魔王は、すつと木刀を取り出し、俺に受け取るように言う。

「これは？」

「私の渾身の作だ、今の友は自分を見失っている、自覚のないうちにな。心を鍛えよ、これで毎朝素振りをするのだ。」

「ありがとうございます!!!」

俺は迷わずに受け取る。

「ついでに木刀の真中を見るがいい」

俺はそう言われ、木刀をみる。普通の木刀よりも長めだ。真中らへんに切れ込みのようなものが見えた。

「木刀の両端をみて引っ張ってみろ、双剣になる仕様だ、使わぬだらうがな」

おお、すげえ、というかどうやって作ったんだ？材質は樫だけど、そんな簡単に作れるものじゃないんじゃないのか？

「それと今日の同好会は、ここではない、大体自転車で10分くらいのところにあるファミレスだ。ついてくるがいい。皆も待ってい

る」

俺はそう言って部屋から出ていく魔王の背中を追う。

すごく・・・おおきいですノノ

今、俺の目の前には得体のしれない飲み物が置いてある、一番下がコラ、その上がレモンソダ、その上がメロンソダ、その上がダイエツトコラ以下略
全部が数cmのずつ入っており、混ぜることなく見事に層を作っている。

「これが僕の実力だ」

やにぶ、すごいな。果てしなく無駄だけど素直にすごいと思える。
というかどうやったらそんなもんでできるんだよ。

「わるいまたせた」

「遅いですぞ、隆盛氏」

「もう、いつまで待たせる」拳氏はしゃべらないでくませぬか？デユクシ」「

お前もこの喋り方が気に食わないのか、よかつたよ。同士がいて、
ここが異常だからな正常（笑）である俺は異端なんだよ。

「またせた、ではあ、始めるとしよう。私も飲み物をもらってくる、
隆盛は何が良い？」

「コーンポタージュで」

「そこでその選択肢なんて、流石は元副生徒会長！！そこに痺れな
いし憧れない！！」

それなら言うなよ、雄吾、それと元副生徒会長関係ねえ。

「空気読め」

ぼそりと呟くやにぶ、本名忘れた。

「またせた」

魔王はドリンクバーから汲んで来た、右手のコーヒーを手に持った
まま、左手のコーンポタージュをテーブルに置く。
俺はそれを取り、掲げる。

「……乾杯」「……」

掛け声とともに、俺たちはコップを合わせる、それとレインボージ
ュース（仮名）はじゃんけんにより政一が飲むことになった・・・
まあんな混沌とした飲み物を飲んだ政一は開始早々トイレにこもっ
たのは言うまでもないだろう。

「量貨の野郎、炭酸だけじゃなくてドリンクバーに会った奴片っ端から入れてたからな・・・無茶しやがって」

とかいいながら、ネタ的においしいぞ！！と心の中でいつているかのように、ぐつと親指を立てる雄吾。

「なかなか美味いぞお」

一口飲んだだけで政一がトイレに引きこもることになった謎の飲み物をもつたいないという理由で飲む魔王。どんだけ強靱な胃袋してんだ。

一方俺はちびちびとコンポタージュを啜っている。美味いんだがこれ選んだのは失敗だったな。普通のやつにすればよかったな。

「ど」

「お」

雄吾とやにぶは謎の掛け声してるし。雄吾は御猪口を持つ時みたいな手の形で口の前で手を傾けながらおという。

それに大してやにぶは同じ動作でおとかえす。意味がわからん。

「ダハハハハハハ！！！！」

そして同時に笑いだす、全く持って意味がわからない。

「おい、隆盛氏、これみてどう思うっ？」

「はいはい、ワロスワロス」

雄吾は何本も束ねた割りばしを俺に見える、すごく・・・おおきいですノノノなんて言うと思ったか既にやったんだよ。

「ノリが悪いな、だから俺はこんなやつが入るの嫌だったんだ」

「すまん、既にそのネタはやったから」

「フザケンナアアアア!!!」

~~~~~厨房~~~~~

「またあいつら来たよ。」

「あいつらドリンクバーしか頼まねえからな、そのくせ何時間も居座るし。」

「迷惑ですね」

「よし、新入り。あいつらの注文取りに行け、呼ばれてないけどいつてこい」

「ええ！私ですか!？」

「首にすつぞ、職権乱用で俺も首になるがそれでも首にすつぞ」

「分かりました」

彼らの知らないところでこんな会話がされていたりした。

「なあ、みんなこれ頼んでみないか？」

それは天性の勘というべきかはたまたただの偶然か気まぐれか、雄吾はメニュー表に描かれていた料理を指差す。

「は？」

「なあ！雄吾それは本気か?!?!？」

「かまわん、私は一向に構わん」

雄吾の提案にそれぞれの反応を返す、ちなみに上から拳、俺、魔王だ。

雄吾の提案するのはカップル限定!!みたいな特注でつくったのかと疑えるでかさのコップに入ったストローがハート型で口をつける部分が二つに分かれているような、あのジューズだ。ちなみにカップル限定ではない。普通に頼める、ただし空気に頼むことは普通しない。

「いつもドリンクバーばっかだからさ、たまにはなんか注文しようと思って目に入ったのがこれだった。」

「私は隆盛と飲もう、中身はミルクだ、それで構わぬな?」

魔王と特濃ミルクを飲む・・・ハッ!?俺はノーマルだ。変な妄想なんかしない。

「普通トロピカルジュースとか変な名前の奴しかないのになんでミルクがあるんだろ、まあいいや、拳一緒に飲もうぜ」

「ハアッ、全くしょうがないわね」

拳は呆れながらも拒否する様な態度は見せない。

「・・・俺一人!?!、野菜ジュース」

政一がトイレから戻ってこない以上仕方のないことだろう、だが男同士よりもマシだろう?やにぶ。

「全くしょうがないわね」

「お客様ご注文はお決まりでしょうか?」

「俺達まだ呼んでないんですけど?」

確かにたった今メニューを決めたところだ。俺は辺りをぐるりと見渡す。客が多いとは言えないが少ないともいえない。こんな状況ですべての客席を見ることが出来るだろうか?いや不可能だ。

「まあ良いじゃないか。すいません、こちらのドキッ これを一緒に飲めればラブラブになれるかも!?恋は暑いぜをのミルクとトロピカルと野菜ジュースを一つずつ」

「ドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも!? 恋は暑いぜのミルクをお一つ、ドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも!? 恋は暑いぜのトロピカルをお一つ、以下略野菜ジュースお一つのご注文は以上でよろしいでしょうか」

「それと、君のスマイルも欲しいな」

雄吾はいきなり女定員を口説きにかかる!!

「申し訳ございません、当店ではスマイルは取り扱ってございません、どうぞマクナルドの方でお願いいたします」

軽くスル!? こういう手合いになれているのか?

「(´・`・´)フラレタ」

「ぢまあ」

とりあえず玉砕した雄吾を笑っておく。

「隆盛よ、そういう時はもっと笑ってネタにしてやるものだ、フウ  
ーハッハッハッハッハ」

「ご注文は以上でよろしいですね? それと店内ではお静かにお願いいたします」

そういつて女定員は奥へと下がっていった、ネームプレートを見る限りアルバイトしかも新人と書いてあった、店員や古参アルバイトの実力を見てみたいと思ってしまった。

「ドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも!? 恋は暑いぜのミルクをお一つ、ドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも!? 恋は暑いぜのトロピカルを一つドキッ これと一緒に飲めればラブラブになれるかも!? 恋は暑いぜの野菜ジュースを一つお願いします」

「バカな!? あいつらは全員男だったぞ!?!」

「くっ、これは明日からカップル限定にすべきだな、っーか普通力ツプルしか頼まねえだろ、ネタでもこんなの頼みたくねえよ」

「まで、今三つといたな、ということ。もうこの店やめたい」

「大丈夫ですよ、きっと一人で飲みきってくれるはずですよ!?!」

厨房は大混乱

「こつなったら皆さん耐性をつけましょう!?! 実は私こんなもの持っているんです!?!」

女店員（新人）はそういつて鞆から男たちの絡む薄い本を取り出す。

「逆転の発想!?! そうか、我々に耐性がないのであれば耐性を作ればいい!?! よくやった時給を10円あげてやるっ」

「ありがとうございます!?!」

厨房はカオスに包まれた。

・・・・一杯1500円で高くね？それが俺たちが店を出る際に思ったことだった。

物語の始まりのようで始まりではないと思う・・・12話になってもいまだ地球

今さらですがこの物語にはご都合主義、チート等がふんだんに使用  
されております。

前回まで一般出会ったはずの人物が物語の都合上いきなりチート化  
することもありません。

本当に今さらですが。

物語の始まりのようで始まりではないと思う・・・12話になってもいまだ地球

奇縁と一度で巡り合えば、再び奇縁とめぐり合う可能性が高くなる。それを俺はラノベとアニメで知った、あくまで架空の世界なのだから現実にはそれは当てはまらないと思っていたがどうやらそうでもないようだ。

それを体感したのは前回から2ヶ月後のことだった。

そう、それは突然だ。始まりはいつだって突然だ。

その突然に対し咄嗟に反応できたのは一度自分が対象ではなかったとはいえ、しっかりと体感したからだろう。

それは、俺がいつものように双剣状態にした木刀を腰にさし、学校へと向かっている途中のことだった。

空の時と同じように突然地面が光り出したのだ。

「チツ!? 念のために常に頭の片隅に可能性を考えつつも、それは絶対に起こってほしくないうえにもし起こったとしても何の抵抗もできない可能性も高く、仮に抵抗できたとしても回避できる可能性が極端に低そうだったからできるだけ考えないようにしていたというのに!?!?!」

俺は一息で上の台詞を言いながらバックステップを3歩踏み、光の円陣から逃れさらに3回バックステップ踏んで距離を取り、木刀（双剣状態）を抜く。

「我が、魔王様より賜ったこの双剣、名を断空・・・空（との縁）を断つこの二振りの剣の力、貴様で見極めさせてもらおうか」

俺は双剣を構えながら、光の円陣から現れる無数の光で構築された手（以下光手）と相対する。

「こいよ、遊んでやる」

俺の言葉を皮切りにというわけでもなく、光手はノンストップで俺に向かってきた。

俺はそれを確認すると偶々道端に転がっていた石ころを光手に向かつてける。

石ころは吸い込まれるように光手の一本に当たると当たった光手が音もなく消えた。

「どうやらその腕は何かに当たれば消滅するようだな。」

例えるならばこいつらのライフは1といったところか。だがその1が無数にいるのであれば膨大な体力を持つ相手と同じだ。いやむしろこちらに全体攻撃の術がない以上それ以上に厄介なのかもしれない。

こちらは一本一本倒さなくてはいけない、そしておそらく一本にでも掴まればたちまちほかの光手達に掴まれ、引きずり込まれるだろう。こちらは常に一本一本に気をつけつつも、全体にも気をつけねばならない。一方で相手はどれか一本でも相手を掴めればいい、そしておそらくだがこいつらは生命体ではない、つまり恐怖も疲労もなくバカ正直に突っ込んでくる。

「――いいだろう、どこの誰かは知らないがてめえの送り込んできた光手一本残らず消し去ってやるよ!!!。」

おそらくだが、これにつかまれば俺も空のいる異世界に召喚されることだろう。そして今俺の手にあるのは空（との縁）を断つ剣。こ

れほどこの場に合う武器はないだろう。

「かかってこいよ、神だか悪魔だが知らねえが、俺は運命に屈しない、この世界で生きて見せるぞ!!!」

観客は犬と蛇一匹ずつ、このめぐりあわせに悪意以外の何者も感じないが今はいい。ただ尻の穴が自然とキュツとしまった。

俺は絶対にてめえのいるところにはいかねえからな!!!空ア!!!

そこからの戦いはどちらも一方的なものだった。

隆盛は、双剣を自在に振りまわし、馬鹿正直に真正面から攻めてくる光手をすべて消し去っていく。

その戦いの様は正に一騎当千、鬼神、戦神、そう呼ばれてもおかしくないほどに、圧倒的な戦いを繰り広げていた。

隆盛の双剣の届く範囲およそ周囲1m強、そこに結界が敷かれているかのようにそこに侵入した光手は尽く消え去っていった。

一方で光手の方も一方的だった。

隆盛を究極の質だとするならば、光手は究極の量!!!

隆盛に襲いかかる光手達は尽く消し去られるが、光の円陣より消し去られた数が次の瞬間には現れる。

おそらくだが、この光手達に意志というものがあれば、隆盛はすでにつかまっていただろう、彼らにできることは愚直に対象をとらえ

るべく進むだけなのだから。

傍から現状だけを見れば隆盛が有利だ。

その証拠に彼は、戦いを始めてより一步も後退をしてない。いや、むしろわずかながらとはいえ前進すらしている。

だが、それはあくまでも外から見た状況でしかない。

（クソツ！このままじゃマズイ！！）

隆盛は焦っていた。戦闘を開始して10分、隆盛はよく持った。だが生物には体力があり、当然体力の限界がある。

終わりの見えない戦い、最初は威勢を武器に、その不安を隠しきることができたが10分もたてばその威勢も弱まってくる。

――ひよっとしたら俺が捕まるまでずっとこいつらは現れ続けるんじゃないのか？

疲弊し始めてきた隆盛は思考もややネガティブよりになり始めてきていた。

だが、それでも彼を動かし続ける思い、空と会いたくない、関わりたくない。そんな思いが彼の持つ彼自身を動かすもつとも純粹で強い思い。

これだけは決して折れることはないだろう。

だが、どんなに強い思いを持っていても体には限界がある。彼の肉体は徐々に疲弊し、動きに精彩を欠きつつあった。

「このままともに戦っていても勝ち目はない、なら――！！」

俺は大きくバックステップを踏み、その間に双剣を裏手に持ち帰る。  
パシッパシッ

と音が聞こえ、しっかりと裏手に持ったことを確認する。

先ほどの場から後退し光の円陣から離れてしまったのは残念だが、仕方のないことだ。俺の気力と体力がもつうちに出せるすべての力を使い、光の円陣を壊さねば俺に勝ち目はないのだから。

「これから見せる技は、お前のような意志もないただの道具に使うのはもつたいたないがこちらも余裕がないのでな。御代はあんたがここから立ち去ってくれるってことで手を打つよ」

俺の言葉を聞くことができなのか、少しくらいは空気を読んで待ってくれてもいいと思うのだが相手は待ってくれなかった。

「そんなに死に急ぎたいのならば、望み通り消してやるよ」

俺は大きく息を吸い込み、溜めを作る。大技をいきなり出せるほど俺は達人ではないからな。

「喰らえ、回転 舞六連!!」

迫りくる光手達に一瞬六斬の一撃必殺の技が襲う。残念ながら相手はきつた瞬間に消滅してしまうのでズバッ！などと何かを切る音は聞こえないが。

一瞬にして隆盛の前方3mほどに光手がいなくなるが、またすぐに召喚されてくる。

・・・双剣で攻撃範囲が短い、そこは武器チートということにし

ておいてくれ。空……つまり空気を断ったんだ。真空波だとかそんな感じで。

俺は前方に光手がいなくなったことを確認すると、すぐさま体を翻し走る。

回 剣舞六連を使い続ければ俺は光の円陣までたどり着き、破壊することができるだろう。だがそれを行うのに後何回必要だ？  
大ざっぱにみて俺と光の円陣の距離は10m、回転剣 六連で切り開ける量はおよそ3mそして、おそらく進めるのは1〜2mまでだ。つまり後最低5回はやらないといけないわけだが、俺体力がもたない。

タッタッタ

俺は全力で十数m走り、思いっきりブロック塀に向かって跳ぶ。乱心した？僕は正常さ。

俺飛んだその足でブロック塀を蹴り再び跳ぶ、向かう先は反対側のブロック塀！！！！

「ハアツ！！！」

渾身の力で塀を蹴り、反対側のブロック塀へそしてまたそのブロック塀を蹴り、跳躍する。

カチリ

俺は空中で双剣を本来あるべき姿、一本の木刀に戻す。こちらには名前はまだつけていない。だが、今なら思いつく気がする。そして、



俺の放った木刀は一筋の光となり、光手達を今も召喚し続ける光の  
円陣へと飛んで行った。

物語の始まりのようでも始まりではないと思う・・・12話になってもいまだ地球

もし思いつけば、隆盛と同好会の日々を書く!!!

補足：ヘクトール

ギリシャ神話の英雄、fateのアーチャーが好きすぎる人はきつと知ってる。

作者的にはローアイアスの投擲武器に対して無敵という概念を作ったものすごい人だと思っている。アイアスでしか防ぐことができなかった投槍をするものすごいお方。参考資料アニタwiki  
槍の名前とかがわからなかったので名前を使用。槍だから英雄の投槍にしたかったけど木刀が槍はおかしいので泣く泣く諦めた。

ちなみに作者はfateをあまりしらないので色々ツッコミどころがありますでしょうが、スル お願いいたします。

僕はふと気付いた25話以内に終わらせれば異世界物なのに異世界生活の方が短

今日はいきなり涼しくなりましたね、皆さまお体にお気を付けください。

物語に11話!!!エピソードかなんか終わらせる感じで1話!!!  
!!!なんかいけそうな気がする。

僕はふと気付いた25話以内に終わらせれば異世界物なのに異世界生活の方が短

俺の放ったヘクトールが音もなく光手を消し、光の円陣へと向かっていく。

「な・・にい!?!」

光手達は本体の身の危険を感じたか理由は不明だが、残った光手達を光の円陣に集め幾層にもなる光手の盾を織りなした。

その様は正に花卉、7つとはいかないが、5つの光の花卉を形成した。

「どうしてお前がそれを知っているかは知らないが、皮肉にもお互いの技が神話上で対決した技の劣化コピーだ。神話上では負けているが貴様のそれは5枚、たった5枚で俺の木刀を防げると思うなよ!!--!!」

キイイイイン!!

光手達の織り成す、不完全な5つの花卉の盾と、現代人の放つ神話上の技を模した一撃。その2つは金属同士がぶつかり合ったような激しい音を立てて激突した。

パリン!パリン!

隆盛の一撃はいともたやすく二つの花卉を破壊し、3枚目に激突する。

キイイイイイン!!!!

ピキッ!!

再び激しい音を立てながらも、パリン！！と音を立てて3枚目も破壊する。

「俺の勝ちだよ、所詮貴様らは意志のないただの作られた物、意志ある人間には・・・いや畜生にすら劣る！！！」

隆盛は気づかなかつた、3枚目の花弁が割れた後に小さく響いた音に、隆盛の放つ木刀に小さな罅が入ったことに。

パリン！！

4枚目の花弁が壊れる音が響く。

————いける！！！！

俺は知らず知らずのうちにガッツポーズをとる。俺は勝利を確信していた。だから、次に聞こえた音が信じられなかった。

キイイイイイン！！！！

再び花弁と接触した木刀はすさまじい音を奏でる。

ピキッピキキ！！

「えっ」

信じられなかった、今聞こえたのは木刀に罅が入る音だった。よく見れば木刀の先端はところどころ欠け・・・いや先端だけではない、全体に欠損が見られた。

例えどんな名工が手掛けたところで所詮は木刀、ましてや伝説の樹を使ったただななてこともないただの檜の木刀だ、ヘクトールの威力



ドゴオ!!!

トンファーは道路に突き刺さり、それと同時に光の円陣の光も徐々に薄らいでいく。光手達はもう出てこない。俺の勝利だ。

俺は、よろよると道路わきに移動し、倒れる。道路の真ん中で倒れて車に轢かれるなんて馬鹿な真似はしない。そもそもこの通りは人通りは多くないとはいえ10分間も人や車が来ないというのは些かおかしい気がするし、戦いのさなか何度も大きな音がしたというのに何故人が来なかったのだろうか？

・・・俺は深く考えるのをやめた。

「ワン!!!」

俺と光手の戦い唯一のギャラリである犬と蛇が近寄ってくる。なぜか犬の背中に蛇が乗っているという世にも奇妙な絵面だが、いましたがファンタジーと戦って打ち倒したあとだ、大して気にも留めなかった。

「ワンワン!!!」

死闘後の火照った体には、夏が過ぎ肌寒くなってきた今の季節の風は心地よい。犬は俺に駆け寄り、勝利を祝うように顔を舐めてくる。懐かれた？嬉しいことだ。蛇は蛇でなぜか俺をじーっと見てくる。俺は少し引きつりながら笑ってみせる。

引きつる理由は二つある、一つ目は当然のことながら相手が蛇だから。蛇にじっと見つめられて心から笑えるやつは蛇好きなやつぐらিদらう。俺は好きでも嫌いでもないから笑えない。

もう一つの理由？そうだな、あれは3カ月ほど前のこと・・・君たちの時間では20日ほど前のことだ。

あれは、俺が友人からPCゲームを借りてそれをプレイしているときのことだった。今はもうこの世にいない空が突如俺の部屋に乱入してきたのだ。

もちろん鍵はかけてあったが、世の中にはピッキングという技術がある。その後はお察しくささいだ。

キーーーーー

「なッ!?まだ消滅していなかったのか!?!?」

先ほどまでのぶつかり合いとは違う耳鳴りのような音が響く。なぜかその音が痛々しそうに聞こえた。音の出所は光の円陣で中心にトンファーぶっさしたから、痛覚があるなら当然痛いんだろうけどね。いや、この場合ファンタジー的に考えるなら魔力供給ができなくなつて暴走しているのか?もうファンタジーだろう触手だろうがなんだろうがなんでもござれだ。ただし獣k(ryだけは勘弁な!!

俺が満身創痍で動けずに現実逃避をしていると、光の円陣はいたちの最後っp・・・最後の輝きを見せる、すさまじい光を放ち一瞬後に現れるは数百本の光手達。

俺・・・と犬と蛇は為すすべなく、円陣へと吸い込まれた。

なあ、神様?俺何か悪いことしたかな、それとも前世でかなり悪いことしたのかな?教えてくれよ。文字数稼ぎのために色々語るけど

さ俺親不幸も特にしてないし、周りにあわせて今まで胃に負担をかけながら頑張ってきたんだよ？

それと父さんは今まで一度も出番ないけどちゃんというよ、海外出張とかそんなこともなくただ出番がなかっただけでとくに仲が悪いとかそんなこともなかったんだぞ。

妹は父さんのこと嫌ってるけどあれは遺伝子が近いから仕方のないことなんだよ、クサイとか言われるのも仕方ないことらしいんだよ。いちいち落ち込まなくていいんだよ、そりゃ心情的には実の娘に嫌われりゃ落ち込むだろうけどさ。

ゴメン父さん母さん、恩返しができなくてとりあえず俺を生んでくれてありがとう、あなた方には文句はないけどさ違う家に生まれたかったよ。ここじゃなくてもっと遠く・・・でもなくてもいいから空と幼馴染じゃない未来がある所にさ。

あなた方は空のこと大好きでしたね、チクシヨウ俺の周りに完全な味方いないじゃねえかよ。俺の味方は魔王様だけだ。あのお方ならばきつと世界の壁も越えてくれるはずだ、いや希望を持つのはやめよう。ありえないことを信じて気づ付くのは自分なんだ。

さあ、こんにちはくそつたれな異世界、俺を呼ぶのはまだいい、いやくないけどまだ許してやろう。だが空を呼んで俺も呼ぶというのはどれほど俺に恨みがあるんだい？

もし狙ってやったのだとしたら力を手に入れたら滅ぼしてやるからな、もし狙ってないのだとしても、力があれば滅ぼしてやるからな。力が手に入らなかつたら・・・素直に諦めよう。

あれ？俺ってこの世界自体は意外と未練なくね？ちよつとへこんだ。とりあえず異世界へは犬と蛇とともにってどんな組み合わせだよ。

僕はふと気付いた25話以内に終わらせれば異世界物なのに異世界生活の方が短  
トンファーキックがやりたかったがためだけにトンファーを出しま  
した。  
そこに後悔はありません。

主人公は、義兄弟の契りを結ぶそうな人と出会ったようです。(前書き)

隆盛「チート寄越せ」

仲鈍「おらよ！……！」

主人公は、義兄弟の契りを結べそうな人と出会ったようです。

目を開けたら、目の前にケルベロスがいた、いや俺が何を言っているのかわからないと思う、俺だつてわからない。さらに俺の混乱を助長させるかの如くケルベロスの後ろには八岐大蛇ヤマタノオロチがいた。

普通に混乱するだろう、目を覚ましたら目の前には3つ首の真つ黒な巨大な犬がいれば、さらにその後ろに8つ首の巨大な蛇がいれば誰だつて混乱するに違いない。

ちなみにだが俺が目を覚ましたのはつい先ほど、顔に何か滑つたなにやらざらざらした感触のものが顔にあてられたからだ。

起きてから分かったけどそれはケルベロスの舌、ああ味見ですか。いつそひと思いに寝てる間に殺つてくれよ。などと目の前の光景から現実逃避しつつ俺は周囲を見渡す。

人がだいたい30mくらい離れた場所で武器を持って武装している状態で俺たちを囲んでいた。何が何だかわからない。

「ちよつとあんた行つてきなさいよ!!」

「ちよ、ジュジュ様が召喚したんですから召喚主であるジュジュ様が行ってくださいよ!!」

「はあっ!?!あたしが死んだらここ終わりじゃん。この主戦力はあたしでしょ!?!あたしが死んだら皆死ぬのよ!!分かつてんの!?!」

「そもそも目の前の怪物どもがいる時点でなんとか事を治めないと

詰みますから！！！！」

身長が大体150cmぐらいの赤いローブに身を包み手には杖を持つ黒髪ツインテールの女の子（推定年齢17〜8歳）と、女の子より一頭身分くらい身長の高い若い兵士が言い争っている。周りの人たちは自分達に被害が及ばないように事態を静観している。

よくわからないが、あの女の子と言いつ争っている兵士（おそらく女の子と同年代）とは親近感がわいた。

「バウツ」

目の前のケルベロスが俺が目覚めたことを喜んでいるかのように吠え、俺を舐める。敵意は感じなかったが恐怖は感じるのとおりあえず為されるがままな俺。後ろの八岐大蛇は突然発光したかと思うと縮んで俺の元に寄ってきた。

ちなみにケルベロスの大きさがだいたい15m八岐大蛇が20mくらいだった。

（全く人間とは失礼なやつらよの、妾はあ奴らなど歯牙にもかけぬというのに）

突然頭の中で声が響いた。

（クツクツク、驚いておる驚いておる。まあ妾もいきなり魔界からここへ来た時は少々驚いたがの）

謎の声は愉快そうに笑いながら俺に話しかける。一体誰がしゃべっているのだ、いやそもそもテレパシーなんていう超能力俺は一切使えないぞ。

(妾はここにおるぞ、お主のお腹の上にな)

俺はその声に従い腹をみる・・・なんてまねはしない。なぜなら先ほど小さくなった八岐大蛇(なぜか頭が8頭から1頭が変わった)が寝ている俺の腹の上に来ていたからだ。

状況証拠的には見ずとも分かる、だが俺は信じたくない。だが見なければ話が進まない。俺は悟りを開いたかのごとく無の境地で声の主を見る。

蛇でした、まごうことなき蛇でした。

(ククク、呆けた顔をしておるぞ、愉快じゃが話しが進まぬ)

「すみません」

とりあえず謝っておく。

(ついでに言うておくが考えさえしてくればこちらで勝手に読むぞえ)

俺のプライベート。心を読まれるとか怖くて一緒にいられツかよ。ある意味空よりも・・・性質が悪くないような気がする。意外と耐えられるかもしれない。

(気にする出ない、妾としても好き好んでのぞき見るのはことはせん、からかう時を除いてな)

(なんとまあ性格のいいことで)

(ククク、他者と話すなど数百年は無かったからの、妾が楽しみた

いのじゃ)

俺は頭の中でそう話すとそう返事が返ってきた。”妾は”じゃなくて”妾が”ですか。完全に俺をおもちゃにでもするつもりですね。

(ところでどこどこですか?)

(おお、そうじゃった、異世界人よ。歓迎するぞえ)

意味がわからない、なんとなくはわかったし予想師はしていたけど理解はしたくない。

(今から説明してやろう、存分にリアクションを取って構わんぞ)

オーケー、理解した。俺と一緒に召喚された蛇と犬が目の前の怪物に化けたということを理解した。ちなみに2匹とも雌らしい。

なぜ、この2匹が怪物となってしまったか。それはこの世界の人間には知られていないが魔界と天界と呼ばれる世界もあるらしい。今回の場合天界は一切関係ないから置いておくそうだ。

まず、俺が光手を生み出してた召喚陣を壊した、それにより発生したエラーが大変だったらしい。今俺がここにいるのもかなり奇跡に近い確率で普通なら存在を消されていたやらなんとやら。全く想像がつかない話した。

それで運よく(とっていいかは果てしなく疑問だが)、こちらの世界にこれたわけなのだが問題が起きた、俺と一緒に連れてこられ

た蛇と犬である、なんか仕組みはよくわからないけどこちらに呼ばれる際にエラーの影響で存在が消されたからそれを保つために比較的存在が近いもの・・・蛇だから八岐大蛇だろjk、犬だからケルベロスだろjkという発想の元魔界にいたこいつらがこいつらの存在を上書きし呼ばれたらしい。

よくわからない話した、無理に理解する必要もない。ただ現実を受け入れて目の前に八岐大蛇とケルベロスがいるということだけを理解・・・できるか!!!!!!

俺が心で叫んだころ、少女と兵士の言い争いも終わったようで、死を覚悟し、もし死んだらあいつに化けて出てやるという思いを前面に出しながら若い兵士が近寄ってきた。

ふと、その若い兵士と目が合う、瞬間俺は全てを悟り、腹の上の蛇を丁寧に地面に下ろし立ちあがる。

向こうも理解したのだろう、俺たちは自然と歩を進めた。そしてお互いが目の前まで来るとどちらとも何も言わずに腕を突きだし肘を曲げ拳を合わせる。拳が触れ合った瞬間2人に確固たる絆ができた。

「お前も・・・なのか？」

「ああ、そうだ」

兵士が不安そうに尋ねてきたので俺は力強く頷く、そして抱き合う。

「よく今まで耐えてきた、理不尽に」

「お前は解放されたのか？理不尽から」

「いや、まだまだ、世界の壁を越えても解放されなかった」

俺たちは傷を舐めあつた、同じ境遇の者同士心で繋がった。

「俺たちは、魂の兄弟ソウルブラザー！！！！」

俺たちは宣言した、現在進行形で訪れている理不尽に抗ってみせると。

それを見ていた周りの人たちはものすごい勢いで引いたらしい。

「とりあえず、兄弟を呼び出した理由とかも説明しつつ、君のこれからについて話しあつていこうか」

「ああ、そうだな」

疲れた様子のソウルブラザーに気を使い俺は同意した。どうせ召喚系のファンタジーなんて魔王を倒してくれとかだろ。いきなり呼び出したおうえで魔王を倒せってか？ふざけんな。

だがまず生きていくうえでこつちの世界の常識を知らないといけない。

いきなりあちらの都合で呼びだされて、不利な条件の元生きていくなんて理不尽もいいところだが、途中から変えていけばいいさ。つかそもそも俺はなんの特殊な能力もないわけだ。あちらの良心に期待するでしょう。

でも、後ろの2匹どうしよう・・・大蛇さん曰く、ケルベロスはずかかなり俺に懐いているらしいし、本当にどうしよう。



主人公は、義兄弟の契りを結べそうな人と出会ったようです。(後書き)

隆盛「誰か俺に人間の女の子紹介してくれ」

仲鈍 つ 漢女おとめ

隆盛「女の子じゃねえ!？」

異世界一日目・・・誰か俺に平穩をくれ(前書き)

隆盛「タグにほのぼのってあるんだから、チートっていらないだろ？」

仲鈍「異世界で魔王がいて勇者がいる、チートなしで生きていけると思うか？」

隆盛「ならばなぜ?!?!？」

異世界一日目・・・誰か俺に平穩をくれ

(気に食わんのう)

「「え?」「」

俺とソウルブラザーは声を八もらせる。どうやら今回は俺だけではなくソウルブラザーにまで念話?もう念話でいいや。を飛ばしたよ  
うだ。

(気に食わんというたのじゃ、妾達をこんなところに呼び出し、そのことを謝ることすらなく拳句利用しようなどとはの)

「・・・」

ソウルブラザーはその言葉に何も返さない、何故返さないかなんとなく理由がわかる、ぶつちやけこいつこの町に未練がねえ!!!  
200mほど離れた場所には城壁に囲まれた町らしきものが見える、おそらくだが八岐大蛇とケルベロスなら単騎でもすぐに落とせる。  
そしてソウルブラザーは恨んでもいないが思い入れもない。強いて言えば理不尽な存在がいるからマイナス寄りだろう。

「それは申し訳ありませんでした、ですが謝罪の言葉は私ではなくあなた様を召喚した者、あちらの魔法使いからでなくては意味が薄いように思います、私どもも同罪でしょうがまずはあちらの主犯に謝罪を入れさせた方がよろしいでしょうか?」

若い兵士は口元を醜く歪めて嗤う。おお、友よ、嬉しいか。理不尽な存在が憎いのだろう。だが周りにとってはそいつの方が重要なた



ソウルブラザーと少女は叫びながら取っ組み合いを始める、傍から見れば子供の喧嘩のようにしか見えなくとも本人たちは（生き延びるために）必死なのだ。

「あれ？俺たちなんでここにいるんですって？」

2人の取っ組み合いを眺めて10分、周りの人たちも事態を静観している、もちろん俺たちも。ちなみにソウルブラザーが優勢だ。といっても少女の方はもはや相手を殺す気、ソウルブラザーは捕縛目的なので中々決着はつかない。

流石に鍛えている兵士相手におそらく鍛えていないであろう少女が10分も耐えるというのはおかしい・・・魔法か？俺たちを召喚したというのならば魔法を使ってもおかしくはない、むしろ魔法と叫べるような不思議な物を使えなくてはおかしい。それがどれほど強力なのかは分からないが、少女でも鍛えている兵士と戦えるだけの力を得ることができるといえるのは確かだろう。

（お主が何を心配しようとか妾が解決してやるから安心せい。この場での問題ごとく容易きことよ）

「貴様の首を話が友の友情の証として差し出すウーーーーー!!!!!!」

「魔法も使えない男が私に齒向かうんじゃないわよおー！ー！ー！！」

ゴッ！と鈍い音が二つ聞こえてきた。おそらく拳と顔の骨が当たった音だろう。女の子相手に顔はだめだよ、どんな理由があるうとも基本的にこつちが悪くなっちゃうんだから、狙うんだったら見えないところをお勧めする。

2人は道化<sup>ビエロ</sup>だった、八岐大蛇という化け物を楽しませるためだけに踊らされた道化<sup>ビエロ</sup>だった。

あれ？八岐大蛇が言ったのは召喚主を連れて来いっていっただけで首までは言つてなかったよな？2人の最後の1撃を放つ際の咆哮を聞いて心の内でのみそう突っ込みを入れた。

「・・・あれは放っておこう」

(妾も十分楽しめた故、あれらにもう用は無いの)

ドサツという音とともに同時に地面に崩れ落ちた2人を見て、そう口にする八岐大蛇(もう大蛇さんでいいや)から返事が返ってきた。一人ごとだったんだがな。

「グルルルル」

ケルベロスは寝言ののだろうか、唸っている、その声を聞きたびに俺を囲む人たちがビビり逃げ出そうとするが、気力で持ちこたえている。おそらく背を見せたら一瞬で殺られるとでもおもっているのだろう、俺だってその恐怖と戦いながらこの場に立っているんだ

から分かるよ。俺の後ろには大蛇さんとケルベロスがいるんですから、殺されたりすることは無いって理解はしているが本能的恐怖からは逃げられません。

例えて言うなら、魔王からは逃れない、かな。

(さて、主は名を何といったかの?)

(隆盛りゅうせいです、けっしてたかもりでももりたかでもありません、隆盛りゅうせいです)

(ならば、隆盛よ、妾の言を代役せよ、主の言葉でも構わぬ、意味さえ通ずればの、声は妾が届けさせてやろう、全員にな)

(了解です、というより俺に拒否権なんてありませんね、わかります。)

俺と大蛇さんの念話を終える、俺は一度周囲を見渡し、深呼吸をして気を引き締め、脳に直接送られてくる言葉を瞬時に自分の言葉に置き換え口を開く。

「私達はあなた方が呼んだあなた方の認知している世界の外から来た住人だ、あなた方の言う魔界という場所からね。呼ばれてきたのだからあなた方が望んだといっても差支えは無いだろう。我らの意思を抜かせばの話だけどね」

俺が一旦そこで区切ると辺りがざわつき始めた。俺たちは魔王を倒すためではなく、ここの戦線を維持するために呼ばれた。こちら辺の事情などは大蛇さんから聞いたからなんとなくは理解している、言ってしまうえば戦力不足、人手不足、この町を守るだけで精いっぱいそれがここの現状だ。

だから、今巷を賑わせている勇者を召喚したという話しにあやかり、同じような召喚を行い、戦力にする、最悪戦力にならなくても神輿として士気を上げるのに役立つぐらいのことはできる。

当然、この町の上の人たちは役立たずだろうとも神輿として扱おうということを考えていただろうが、下の人たちは圧倒的な個人の力を持つ物が現れると思っていた。

・・・いや現れたよ？ただし俺以外の2頭だがな！！ついでに言うて魔界って言うのも御伽話の中だけの存在だと思われてるらしいよ。つておい俺まで魔界出身的なことになってないか？

「騒ぐな、五月蠅い。貴様らはただ黙って聞いていればいい。」

騒ぐ群衆を威嚇して黙らせる・・・いつの間にか起きたケルベロスと大蛇さんが。どう見ても俺は虎の威を借る狐ですね、どうしてこうなった。

「彼女らは俺の配下です・・・え？」

俺は焦る、頭に入ってきた言葉ではなぜか俺が後ろ二人をまとめているというようなことになっているからだ。

（そちらの方が面白そうだな、安心せい主の安全は保障するぞえ、ケルベロスも言うておるぞ、例え世界を敵に回してでも主を守るとな）

（重っ！？なんかケルベロスの覚悟重！?!?!）

（恋する乙m）いわせねーよ！？俺の精神上の安寧のために言わせねーよ！?!）・・・狂ってもらったほうが面白いが、まあよい、徐

々に狂う様を楽しむとしよう)

俺はその言葉をきいて体中に稲妻が走った。ドSだ、絶対にドSだ。  
・・心を鍛えよう。そう決意した。

俺の言葉に再びざわつくのを感じる、そりゃそうだ、俺みたいな明らか  
に人間にしか見えないやつが化け物2体従えてるって言ったんだ、あいつは人間の皮を文字通りかぶった化け物だとか聞こえてくる。実際に想像するとかかなりグロイ。

それに、暗に俺は後ろの2体よりも強いっていつているようなものだ、どれくらい2体が強いのかは知らないが確実に俺が一人いたって敵わないがそんなことを相手は知るはずもない。

そこをついたハツタリだ。ちなみにケルベロス一体で町一個なんて余裕で落とせるそうです。マジ化け物。大蛇さん？国一個余裕だそうですね、もう訳わからん。

「俺はあなた方に協力するつもりはない、なぜなら協力するメリットも少ないからだ。衣食住など自分達で確保できる。むしろあなた方を制裁として滅ぼしても構わないくらいだ。」

その言葉に今度は逃げ惑い始める・・・がムリ！！背を向けたまま固まる群衆！！その様は正に！カエル！！蛇に睨まれた蛙のごとし！！！！

実際に睨んでいるのは蛇だが、全力で逃げようとしているのを止めるってもう非現実的すぎて慣れてきた、最初から非現実だったからな、具体的には一部を除いて完璧超人の空と幼馴染だったことか  
・・・愚痴を言っても始まらないか、さあ通訳を開始しよう。

「・・・といつても我らもあくまでも鬼でもない、ただの8つ頭のある蛇と3つ頭のある犬とそれを従える者だ。我らを呼んだという

この偉業褒めてやろう、褒美としてこの町を守ってやろう、食料さえくれればな。」

八八、現代人である俺がいきなり町の外で生活してまともな生きていけるはずがない。だからこそのこちらがかなり譲歩しているように見せかけて俺が生きていけるようにするための案を与えてやる。町とかに住みたくないそうなんですよ、大蛇さんとケルベロス。

「食料とはどれくらい必要なのでしょうか？」

顔を真つ青にしながら、杖をついてやっと歩けるといった具合の髪の毛が・・・なおじいさんが本当に勇気を振り絞ったのだろう、前に出てきた。おそらく長老か何かだろう。

「10人分で良い、十人分の食料だけで安全が買えるんだ安いもんだらう」

「ですが、まだ私もはあなた方の力のほどをしりません」

最後の方が蚊の鳴くような完全に一人言をいうような声量とになっていた。

ドドドドドドド

・・・こういうのをご都合主義というのだろうか、タイミング良く町に大量の魔物が押し寄せてきた。その光景はまさに黒い波！！到底数を数え切ることなど不可能に思えるような圧倒的な量！！

生憎と俺たちを呼びだす儀式のために町の方は手薄になっているのだらう。

大蛇さんによって動くことのできない体を必死に動かそうと頑張っている人たちがいる。

「ちようどいい、全く持ってちようどいいな、今から我らの力を見せてやるう、やれ！ケルベロス！！」

俺のその言葉（正確には大蛇さんの言葉）とともにケルベロスは3つの口を開き、口の中に炎を作り出す。

少しの間その光景を見ているとぐにやりとケルベロスの辺りに景色がゆがんだ。

瞬間に俺は悟った、俺の周りは本当に化け物だらけなのだ。そして俺に平凡を超越せ。



犬、蛇、人間 今のところのヒロイン候補（前書き）

いづれ追加予定

いづれ人間削除予定

## 犬、蛇、人間 今のところのヒロイン候補

なぜか犬と蛇とともに異世界召喚される

なぜか犬がケルベロス、蛇が八岐大蛇になっていた。しかも俺の味方らしい。

なぜか武装している人間に囲まれている俺達

なぜか交渉することとなった、内容はお前らの身の安全保障してやるから飯よこせ。

なぜかタイミングよく魔物が襲ってくる。

俺、ケルベロスにそいつらを蹴散らすように命令（お願い）する。

3つの口から炎を吐きだす。 いまここ

我が世の春が来た!!! 願望

「ヒイイイッ!？」

今だ固まっている人々は悲鳴を上げながらもその場を動けずにいる、アンモニアの臭いはしない、外だからなのか、それとも漏らしていないのかは分からない、前者であることを願う。



る。

だが俺に拒否権は無い、そろそろ自由選択というものが欲しいです。  
「それで、あちらで倒れている者たちは回収してもよろしいでしょうか？」

(構わぬぞ)

「どござ」

「それとこの拘束魔法を解いてくださると大変助かるのですが」

(指パッチンせい、そのタイミングでといてやろう)

どれだけ俺を大きく見せたいんだ、だれでもいい等身大の俺を見てくれ、空の幼馴染とか化け物2体を従えるなんてそんな風に見ないで俺自身を見てくれ、お願いだから。

・・・あれ、それじゃあ俺自身を見てくれたのってコンピューター同好会のやつら抜かすと・・・俺は全力でその考えを投げ捨てた。

何ともおぞましい考えをしてしまったものだ、俺には同好会のやつらがい・・・ねえよ。ここ別世界だろいるわけねえじゃん。

そういえば、魔王さんに渡された木刀壊しちまったな、ああ、唯一の元の世界とのつながりが。

(大蛇さん)

(なんじゃ？断るが言うだけ申してみい)

(元の世界に)

(駄目じゃ、)

「バウ」

大蛇さんと話しているとケルベロスの右の頭が俺を啜えた。

(こやつもお主に懐いておるからの、離れたくないそうじゃ。妾たちは主の世界に行くことは叶わぬゆえにそう簡単に戻してやるわけにはいかぬのじゃ)

ゾクツ!? その時俺の背筋に寒いものが通り過ぎた、俺の貞操がふと心配になった。なんとかなるだろ、いや、してみせる。ただもしもの時のためにこう願おう、せめて擬人化がありますように。だが、俺の脳内で像を結ぶのは雄吾から借りたあのゲームのワンシーン、そして俺のトラウマ。犬と蛇とおれの・・・

(そうか、そう言う類のものが望みであったか、よかったのうケルベロス。)

「ちげえよ!?!?」

つい、声に出して反論してしまう。俺はまだ指パッチンをしていないのでまだ固まっている人たちは何事かと思いつながらもちちらを振り向けずにいる。

「あの、そろそろ・・・」

パチン

俺は長老に言われ、我に返り指パッチンを行う。その瞬間に固まっていた人々は地面に倒れる。ちなみに俺は初めてパッチンといい音を出すことができた。いつもはこんなきれいにはいかない。どうでもいいけどケルベロス（の右の顔）に啞えられているので格好は付かない。

ああ、ブレザーが俺の自重で悲鳴をあげている。どうでもいいけど服これ一着しかないじゃん・・・じゃあどうでもよくないな、死活問題だ。

俺がほぼ全裸で過ごす羽目になりかない。

「それでは我らはこれより住処を作るので退散させていただきます」

ドナ ナ ドーナ、俺を啞えてゝ 哀れな俺、連れ去られてゆくよゝ

にルを入れた人は負け。

「一週間後再びこちらに来る、それまでに食料を用意しておけ！！それと服もだ！！！」

一週間後にまたここに帰ってくると電波・・・じゃなくて念話を受診したので俺の欲求も含めて比較的フレンドリーに叫ぶ。

「ガウ！！！」

だが、その後にケルベロスが続いたことで見事なまでにいい笑顔で森難題を押し付ける外道のような印象を与えてしまった。

ヒィィ！？や、やべえぞ！？世界の終わりだ！！などと叫ぶ者がいたせいで混乱が助長され見事なまでに悪役へと墜ちました。

髪の毛焼いちやったからかな？あいつら全身の毛という毛がなくなればいいのに。

（おお、そうじゃ。これから妾達と友に暮らすゆえにいちいち大蛇さんやらケルベロス等と呼ぶのは堅苦しい、故に妾達を愛称で呼ぶことを許そう、いわゆるにつくねーむというやつじゃ）

（・・・御断りs）

「くうくん」

俺を啜えずに余っている右と真ん中の顔が寂しそうな泣き声を上げる。

（お主酷い奴じゃのう、おとこめ獣女がこんなにも悲しそうな顔をしているというのに）

ああ、いつから漢字の読みはここまで自由になったのだろう。

（ケルとおーちゃんとお呼びしてもいいでしょうか）

「ワン！ー！ー！」

ケルベロスことケルは嬉しそうに吠える、了承でいいんだよね？

（構わぬぞえ、主から提案してきたもの故いまさら撤回などさせぬぞ？こちらはそれで良い言ったのじゃから）

いやいや構ってよ、なんで日本の神話に出てくるようなやつをちや

ん付けでよぶことになるんだよ。つーか以外に気になってません？  
ちよつと鼻歌？聞こえますよ。

「ケル、運んでもらっていて本当に申し訳ないんだけど、地味に首絞まってるから一回おろしてくれと助かります。」

「ガウ」

俺がそうお願いすると、ケルはゆっくりと俺を地面に下ろしてくれた。とりあえず唾液で襟が濡れて気持ちわるいから脱ごう。

辺りを見渡すと、自然一色今までテレビや修学旅行など学校行事以外で見たことがなかったような光景が広がっている。いや、ここまですごい自然の景色は修学旅行でいった緑あふれるあそこは届かない、テレビの中だけだ。

文明の利器あるのかな？期待・・・これから森に住むんだから使えないか。使えそうにないな。

「おーちゃん、この世界にギルドってありますか？」

心で思うだけで、答えが返ってくるというのはなにか寂しかったので口を開き尋ねる。

（・・・ある、だがギルドとは組合を指す、隆盛の望むものは何のギルドかいわぬは感心せぬな）

（間はなんだったんですか？）

（分からぬかったから主の心を読んだのじゃ）

相手に伝えたいこと聞きたいことは簡略せずにしっかりと！！その心に刻み込む。

（依頼することは可能じゃろうが、暗殺相手になにも非がない場合は受理してもらえぬはずじゃ、むしろ危険人物としてマークされるぞえ、先ほどいた者共の記憶などはすべて読んだ故分からぬことがあれば妾に聞くがよい）

「うわ、それなんてチート」

便利だけど、そう心に付け足す。異世界に来て1日目だが、これで俺がすべきことは決まった。

まず、金ためないとな。あいつが危険人物としてマークされないはずがない、その時に備えて俺は金を貯めよう、依頼料として払うために。

あいつがこの世界にいないのであれば、まったくの無意味だが俺の勘が告げている。奴は絶対にこの世界にいます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5712x/>

---

俺にかまわず先に行け！！・・・俺？追いかけるわけねえだろ

2011年11月19日18時30分発行